女學校
用讀本

# 源氏物語拔萃

夕顔

二

夕顔

此巻ニ於テ、夕貌の上といふ女ハ帚木の巻まで、既申ねこのるでしこの方をよみこのハ志たる女のとくそハ帚木のおをよみし体ふかれ妻状次の巻まで出塀といふごとくこれもとよりさる名の女まハあらざるを、仮つくりさして云へばく、

段落

此巻ハ、二大段十小段まで區別もべし一大段の一小段まで於てハ、大貳の乳母を訪ひて國ら尋ぬ夕貌をつるふことを叙し、二小段ハ惟光まで夕貌をたぐのれと

# 夕顔の巻　凡二大段十小段四十二

此巻ハ源氏十七歳。中将と申せし年の夏ト月までのことを。巻の名ハ。夕顔と詞を以てなづけ。白くさけるをそへ夕貌とかゝ。結ひ付たる白露の光りそへたる夕貌の花」とあり。夕顔ハ夕貌の方の女房の名ハ。それのことぞつくる白露の光りそへたる夕貌の花」又源の方よりてこそそれのことなるこめたるそのれくほのぐこつるるの夕貌」とあるを取まてゆへ。さて此巻ハ結尾まで。ゆ惜と彩端萩と夕貌とを合せて。彩とつゝ弦びたまで。帚木の巻とひとつきなるもとハ。先達の説のめくるれど。八條ゝゝりの陽光のびあるもとハ。とかき出したる冒頭のさまハ。もゝゝゝ夕貌のまとぞつゆる。されバ夕貌のかくまでのへるまで。一大段とゝ。末をまと一大段とそなつ。○此巻の首まで八條の休息所を著ハしたるハ。葵榊の巻ハ伏線にして。尾まで玉鬘の文のことを叙したるハ玉鬘の巻ハ伏線。又惟光と右近の履歴を。何とかく物語のうちまで含めて出したるハ。皆後の巻くまで見いるく人なれとなり。○評

命じのふことハ、條の中
夏不中夜のれと恨の
ふ、三小段ハ源五条夕
貝のもとへ通のふと、
四小段ハ、五条の八月
十五夜、五小段ハ何ぞ
しの院まて夕貝うせ
のふ始末と、小段ハ、夕
貝を山寺へ送る始末
へ、次まて二大段の一小
段まて於てハ源氏物語
の餘り山寺へ行のふ
と、二小段ハ源の中納
言右近の物語のこと、
三小段ハ源の中納言
の餘波まて、文脈と彩
端萩との文脈を表、
四小段ハ同ト中納言
の餘波まて、夕貝四十
九日の中法華五條の

釈まて。夕貝の上ハ浮舟の文まて出したるのきざまと。
とかるゝ。いとゝいとゝれゝう。彼ハ三條の八月十三
夜。光ハ五條の八月十五夜へ。又この右近ゞ夕貝の
の上を物語るゝ。この光の尼ゞ柏木の父の上を物語
るまて似たり。彼ハ男のことを物語る。光ハ女のことなるゞ。
彼ハ略し。光ハ詳まゝ。たるハ、光れのまて似寄りたることゞら
え。重波を者くゞためまて。そべて何るまゝ。前まて簡な
るハ。後まて詳まゝ。あまて詳細なるハ後まて者略まる文法と知るべし。

六条まゝ。光氏ハ思びありきのけうちゝう海のでるふなのやどりまて。大武乃めのといくまづひて。

（令もの中なるまゝ）あまゝ。ゆまゝ。ゆけるまゝふゝいんまて。でうなるいへゝろねて。ハしゝゝう。

（冒頭ゝ。系の中息所のこと始めて書出ゝう。帚木巻まて思ひ出ゝう。）

思ひのゝうまゝ。ゝ。ふもあまゝ。ありぬべけれども。まて。女語より出ゝう。とある細の説まゝ。○六條の中息所のこと。
ゝまゝのめゝう。たるゝ。伏線まて。葵の巻まて。ありて前坊
のゝの方なるまゝ。細まゝ。たるまゝ。○なるやとゝ。中宿へ。○大





家の状況ハ、ゆまゝ。
まて。文を結べる。

**眼目**

評釈まゝいくるぶめゝ、
中段まゝあゆゝ。といふ
語を、一篇の眼目とせ
られたるハ論なけれ
ど、第段まゝ於て、源氏
夕貝と馴て語らひの
へど、行中ゆの思ひ物
まハあゝぬのと疑ひ
のふ状を眼目とゝ、
後段まゝ於てハ、すぐふ
といふ句を眼目とし
たりこれ疑ふもすぐ
ふ。あゆゝ。むの一端
なれ。うゝめでた
し。今試まゝあゞれで左
のめゝ。才一大段ハ小
段の才一節注まゝ。

貳乃免のと」源の乳母へ○五でう
るいく」大貳の乳母の家まゝ
たまけれ。ゆ。ゝてこれうつめさせて。まゝ。ける
祇。むつうゝげるまゝ。ゆ。ゝ。ゆ。ゝ。ゆ。

さぶらひとい〻ゞ」同オ四節なきまどひ待ら
んよめくれまどひて」
オ二大段の一小段オ一
節ゝまとひの中まも
おぼをよいとくるし
くまどいれのゝゝゞ同
オ三節ゝれもおくれ
ゞとまどひ待りて同
オ五節まどハーのふ
おいらゞきとと泣ま
とひて」同オ六節い
づこともちくまどふ
ふちーのふ」ゐまり
をべりおりていしく
みんちまどひけれど
をくるくゐひまどふ
ゝまどふ」二大の二小段
の才一節惟光こちら
もさるぎまとゝゞ同

のそりておぼさる」一小段の才一節ゝ夕顔の家
てみるさまゝ○門ハさーしうけれバ」これ付ふの
要ふるり。源大貳の乳母の家を訪ひのふよ。門をさー
たれど。志ぢー待のふあひぐゝよ。夕顔の門をゝ付のふ
ゝ。これぞ夕顔のこの出来るゝゞめとハすれ
るるり○むつこうーげるるおぼぢ」あやーくゝ苦しき
大路ゝ○ひこぎき」檜垣ゝ○をこのーきひこいつきの」半
蔀ハ上の方のこゝろなげてあるゆゑ。人ゝの額ぞうりみゆるゝ
○をきあげ」簾のひまもり透てみゆる女房の影ゝ○
あるぞちよもあけたのき云ゝ」めつゝさよ丈さき人と
思ふるくとゝ。也ハ中二階めきたる長屋の物えよりさー
のぞけバ。せんさきゝ人と思ひのふゝ○いのるるものくつ
どくるなーん。とやうかそうておぼさる」をいいとあやーく
丈さき人とゝのふゆゑゝ。如何なる人なーんと甚怪
しゝものふゝ。これ世巷の怪談をかき出ス伏案なり。
所なもいゝうやはーあまゝ。さきのおそせ
のいず。詮とのきーん。とうちとけのひて。きこし





オ二節殿の内のゝあ
しをそゝまて思ひま
どふ」也ら十四のまどふ
ハ皆眼目ゝさて九月
廿日のほどゝそあこ
ゝうえて源ひて」とあ
るて源のゝゝちのや
ゝ中あ性よ立ゝのゝりた
さまを志めーたれど
也ようまどふの眼目
を省けり、

**眼目**

也ハ本文の注のふ
まつのべーし、

**一小才二節**

ゝいれの袖をく」又迄
の間るく狭きゝ○い
げこのさーて」ゝあゝ
古今集在中ハいづこ
のさーてあるんゆ

さーけぞきのくれバ門を志と蔀のやうなる物お
しあげるゝいみをを。表よいげこのきーてとおのるーすせだ。
のうてなもおれ形ゞとるりきをうけゞ川物よ。
いとあをや青このるるのづ葛のこちよげよをひこく
きるよ志ろきさ花ぞおのれひとり思ふ笑まゆひ
らけゝるを。源の口をさひゝちのゝ人よ物ゆとひとりごちのふ
を。ゝ跪ゝいみておれ志ろくさけるをゝん
夕ぞほとゝ伺る。花のゝハひとあきて。かうあ
◎◎◎垣根
やーきのきぬ人さき伺をけるとゝけ。げよ

きとまるをそやとく
さるむる」とあるを
取りて何処のさして
あ給ふらんと思ひな
せば、式部ろるき宿屋
も玉の基も同ふ
とのさま〇玉のうて
なる」細流よ何せんよ
玉のうてるもやへむぐ
らもへらん宿よぬ〜り
〜そねめ」とあるを取
れり、こゝハ上よいつり
〇きりかけろもの
竪の木よ切りかけを
て横よ板を打付ふる
屏へ築地の代りよ用
ゆる〇をちうて人
古今よおりて枝をち
うて人よ物ゆ思はれ
そのそこよもろく

いと小家ぶちよ。むつのーげるとうけこのもか
のもあやしう打よろぼひて。むぬ〜志ろぬ新の
つまちどよ夕負の蔓纏ふる
ぎりやひとふさをうてまゐれとの孫へば。この
仕合ヤヤ〜
おーあけふる門よ入てをる。さもぶよざれたる
やうと戸口よ。黄生絹きるるもぐーしのひとへだの袴ちぶ
きるーたるうふハのをうーげるいできてうち
童の女へ
まぬく志ろき扇のいろうこぶーふるをおれ
よおきてまゐらせよ。枝ちるさけるげなるふを。
とてとゝせられぬ。かどいいて惟光の朝臣の



さけふ〜何のふを」
とあるを取れり〇
打よろぼひて」まゐ
ぶーしてゝ〇むぬ
むぬーしのーぬ」俗おも
だくぬゝ〇枝ルな
さけるげ云」夕負ハ
蔓草なれバ枝ルもな
ふるーてあるゝされ
バ扇ゝのせてまゐる
〇かどあけて」門を開
てゝ、是ハ上よ門ハさ
ーたりけれだ」とあ
るゝ尾ゝ〇ゐぎ狐云
ゝ」惟光鑰を置ふ
れてひまどり、陣を
大路よ行せまうし
をり狩ふるゝ、

一小ノ第三節

惟光ぶ兄の阿闍梨

花を持へ
たてまつらん。惟光何
のぶさを知きまどふー
いできたるーて
仏りていとふびん
へらくべきくを
き大弥よ。ふちおちおそーまーてゝこのこまりやん。
ふを引入て陣ゝりふ
ひきいまそおりふ」一小段の第二節ゝ。源車の中
より夕負の花をゝつけて折兄
らせのふこれゝ川ぶあよの阿闍梨むこのみのハ
きまゐり。尾の女ゝ
のゝ。むもめなどゝりつどひゝる花をそかくお
ハーやーゝる悦をまうさなきとよのーこまる。何ま
尼とゐれるゝ
ゝ大弐乳母
ゝ水ぬおきあぶりておーげるきゝ多なれど。拵ぶーく
尼何
原のゝ
思ふゝへつるゝことはたゞかくおまへよさふーひは

毛ハ比叡山の僧なるよ一ホ末よ尼えこう
○ホ一こなる「ゑ雖ずるえ○いもこのもろ一」
尼よ敬て斉戒の験よえ○今ちんあえこ仏
の云く」今ハ弥陀の来迎
ありても残る会ろ一
とえ○よろげよ注」
尼君ハすろけよ注え
○かく世をそなるく
さまよ」尼ろなり世を遁
るく狀え○猶住たのく
俗の名泉進などを極め
のふ行志をもえのへと
○らくのもれのすみ」
九品上品上生なり、今
こそあらず仏の由光
もハ住くとひ一を
芸よ奇特の相えと細

らんぜるこのかえり侍りなんと惜口をしう思
へまへ猶豫ひしのどいむとのもるによみず雙
へりてるん。かくこの俗のうるをおそ一ますをえのへ侍り
ぬれバ。今なんあえこぞ仏の法ひのりもんきよくま
たま」侍べきなどきこ遁てよろげよろく日ごろ俗用
おこりがえくものせらるく俗やをのこぐちなげき不安心
ろうつるよ。おく世をそるるくさはよものーの
へバいと哀よくちを一うちん。いのちなぎくて。残念
特伝えこのくなどもえるーのへ。さてこそこの九品
もれのすみまもさえりなく生れるえめ世よ





流よいえり○ホこほ
るをこよ」俗ろく
でなハ人ぞもえ世ホ
ハ世ろり尼君のハを
察して云え○ホほよ
えるれ」マスグよえ
るるえハるえるるぬ
も乳母などのハよハ
愛よひのれて人なる
ろと思ふさ歯え○
ホもいさ一う」玉小
掃よ名ホも大切よ
○ホころよ」愛えバ
え、メッタニえ○そも
きぬる」既よ尼こえり
て拉たる世を云○つ
きぞろひ」ツキ合テえ
○思ふべき人くの」三
オまて母の更衣に
離も六オまて祖母よ

きこ一うみのこるえろきさぞとなんきくなど。
俗ぐこその結ふ。地ふるるをこよ。乳母などやう
ハ思ふべき人ハ。あさ一うホほよえるるくものをま
していとおもこく老う。馴走なこ
ホもいこ一うかこ老けれく地母べあ雖くえ
ろよ俗ぞちなり。」尼君の子供上はあり
むきぬる世のさうぞこきやうよこげのろひそみ頻
ハらんぜられのふ。つきこ一ろひめぐ目合スえ
いと哀とおぼして。幼いえげまりけるほどよ。思ふ
べき人このうちまそくものーのひよけるこ死きえ

養育
たくみむ人あるやうなるとしごろのどもたちく
おのひむつぶるもぢをまことなくなんおぼえ
原生ち
ひとくなりて後い。このぎりあれば。夕ゆうがほえ
きこえ。原の
なほ久しうこめんせぬ時ハ。原の
尼君を
ふうひまうづることいなれど。
るをさしぬ別ハちくもおれとなんなどこまや
かよよかひひそ。おしのごひめくる所神のよ
ほひも。いとおせやさまでうりちたるよげよ
つで。おしなべくぬ人の所をくせぞう。とあまを
をいいいいとみつる子供ども。れうち志ほたれけり

九号六

養育
たくみむ人あるやうなるとしごろのどもたちく
おのひむつぶるもぢをまことなくなんおぼえ
原生ち
ひとくなりて後い。このぎりあれば。夕ゆうがほえ
きこえ。原の
なほ久しうこめんせぬ時ハ。原の
尼君を
ふうひまうづることいなれど。
るをさしぬ別ハちくもおれとなんなどこまや
かよよかひひそ。おしのごひめくる所神のよ
ほひも。いとおせやさまでうりちたるよげよ
つで。おしなべくぬ人の所をくせぞう。とあまを
をいいいいとみつる子供ども。れうち志ほたれけり

泣を塩垂といふ

一小ノ段四節

仏法などこと仏法の祈りのとなどとてのて。物語などしのふうちまの日のくれまるさまを。○ありつる扇先刻の扇をそえのふ状。○ものそうしたるうつりの持則したる人のほどもおしられてたき物のうつり香の深たる。○人あてはおしあてはの家人あてはを夕貌の花よたとへていふ。さはおしあてはよ源氏のとぞ思ふ光をそへてうるはしき君とそうり。○ものとを

一小段の第三節。源大貳の乳母の家を訪ひのひて。尼君并に家族を第面しのふさまを叙せり。始より尼君をもどのしとおぼうる子供ども。とあるまで子供ハい。

仏法などみくをもどむべきことなどおきてのの孫ハせて。生のとて。怪光よ。紙燭をそくめて。ありつる扇所見ればバ。ものなしうしたるうつり香。いとをかうなつかしうてをいいいいをびおきたる

夕貌の女房

人あてはそれのとぞみる白露乃光そへたる夕ぐほの花。そこもとのとなくこのきまぢらハしうる。貴

もあてはこのよゆゑつきたれだいと思ひのほうをの由所

ーうおぼをもあれうつよ。西方の家よハな

よ人のもむぞ。ひきてたりや。とのゐへば。俗のうるさきけんとは思へど。さはやさぞ。惟光詞
べれど。だうざの。病者
わどよ。となりれとはえゆ侍らびなど。ぶたな
げよきこゆれば。源詞
このあふぎの。ろげぬべきゆゑありてこゆ。なほ
ほはあられんきれんものをめしてとへとの
るへば。惟光そあのやどりなるをの。下男こ侍よびて
とひきくやうめいのをけなる人の家よりん侍
りけるをとこいみるのよりて。田舎夕良の乳母の女揚名介女なんにこのく

源氏物語　ゆふがほ　七

りてとハ任国などよ
ハあしでたぐ旅ゐ
たるなるべし。○東こ
のくて」揚名介の妻を
うくて色めのしきとを
○考りうのほ考えく
りとと思へる白之俗デカ
シカホ之○めさましうす
るべきき」めさまし
くあるべきなる際と之、與
の醒さうなる際と之、
○さりてやを匠かくれ
る」きつけていひおと
せたる心の之○まぐし
ぶくき」捨宅のくきと
○いさうあしぬさき」
あれ所と知きぬやう
よ書籍のふ之○ふり
てこその家」そハタ白
を女よたとへていへ

の妻之
妻の兄弟之
先近下男夜之
とやり。
くくくくきとふ考もびとのえ考り侍らぬやや
あしんときこゆさしばその家づの人人なくまこと
りぶほよ物なれていくるうれ。衍カ と免ぎはゆこうるべき
きふまやあしんと知ぬせどさして匠かくれること
、ろのよくこのこぶきぐしうくきぞ。きんのこれこのこと
よふおもうぬ所んなりすしたたくうぶみよい
ふいあらいぬさはよいいいきこのべのひて。
原
りてこそそれのとも考えたそのれよほのぐ
うるそれの夕方の日。あるつる先刻之 所侍多してつのそ

り、さいハ近よりてこそたゝーあるよき女とハ、
やうのマアタくれまほのぐらつる女ハ何
とも知られぬとゝ○
さ一おどろう一」タ
自の御ゝより髪ーけ
るゝ○内いくゝもな
く往へけれど内ゝ
もつ逢まるく時別
を稀ーけれゝ○か
くるぎとめの一」の
やうまるぎとめきて
内ゝ家あれゝゝ

一ホノ牙五節

いと志のびて出るふ
上る尼君の家を出る
ふとあるハ、出んと
るふゝ、世ハよいうり
て、ゆとうよ出るふゝ

ゆゝ(侍女)ぬ内さ海なりけれど。いと志るくゝ見ひ
あてられのゝ(俗の劇月)る内そばめ(俗)ゝ志ぐさでさ一おど
ろう一けるを内いゝ(サー不都合)ゝ志くゝ往へけれゝ。
さなきまかくゝるぎとめの一けれゝ。あまえていの
よきこと逢んなどいひ志ろふべのめれど。絶ざまし
と見ひて。内多ハまゐりぬ(夕鳥の宿)」一小段の牙四節之乳母の
ひて。内の内ゝ(先駈)ゝ志きのまゐ(松明)ゝ志のうゝていと志のび
い勇く状ゝ。家を出て。扇の家をゝ
て出るふ。ゝ(半蔀)ゝ志みあ(下)ゝてけり。ひ(透間)ぐうゝ
る大の初ゝり。内ゝ(木立)るようけゝほのうゝ表ゝり。内
六条内息所の家ゝ
んぎ一のふまい。こぐち(前栽)せんざんなどゝ志べての家仏



○ほゝゝるようけゝ(引)
ふゝ古今集意よりゝ
れゝ蛍ようけゝまゝ
まゝゝ志ひうゝうね
ゝやゝのつれゝゝき
ゝあるを雨れゝり、家の
き明らけ一、けゝハ
清でよむべ一、塔り
てといふゝ○あさ
げのゝまゝぐゝ(万十二
引)のせゝのあゝげの
まゝぐゝよゝくゝえゝて
ゝのあひゝをこひ
くゝゝのゝ」とある
を引けゝ、家のき明
らけ一○たゝゝのな
き一ふ一ゝ(彼のチョ
ットシタタ自の家一
そを寄ゝせ一ようゝ
内目とゝまるとゝ、

ゝ(ヒロヤカニ)ゝ(美ゆゝ)ゝ志ゝ志ゝ志

二小ノ才一節

怪光日ごろありて云々。怪光ハ毎日さふらふ。ぬべきを病者あるゆゑ悔恨したるえ。あつのひてちん。けちんのさーとぞの下よえまゐらさるーとふを者けるえ。ちのくまありよりて。床の中側近くよりてえ。なのだうーくも。志のともえ。ものーのふ人。来て居る人え。あるべけれど。あるやうなれどえ。その人とハさーよ家の内の人だよ志ーせば。いうなる人とも家の内の人でも知さぬとえ。のふ拙え。宅近を一大段の一小段とえ。此段大貳の乳母ハ客にて。夕食ハ。さてはふよ。除目息ふを出にハ。無用のやうなれど。ふも此志どもの部ろうーのふ。とあーて。床ハ御息所もさるとなれど。このつハ此志どもの部ろうを。掛のふさまよえ。色たり。よこて。御息所をあらーたるふ。のるて葵神の巻の伏案え。

怪光日ごろありてまゐれり。ひづらひ侍る人なほよりげよ侍れバ。とのくーうのえ。あつのひてちん。看病などゆ。臣て。ちのくまみりよりて。ゆ由。怪光汎おほせられ。後ちん。隣家えとなるものとを志りて侍るものよびてとそせ侍るとーすどもなるぐーくもゆ侍ぶいと志のびて。さつきの五月のころほひより。ものーのふ人ちんあるべきをれどその人とハさーよ家のうち





○志びらぶろ物のごとだうり。褶えに枚帯のとえ。裳の腰よりとふ帯えにもハのごとふ金具あるゆよかごとだうりとのけたり。○きのふ夕日のゑ。細流よ西向なる家なるべしとあり。上よ対西なる家とあるよ図ド。○おぼえーを。世の思ひなるしーそえ。○けーをえひの祖母の齢のほどえ。○人のうけひうぬほどーよてゐよ。世の人のゆるさぬぐーゐるまでもえ。○ゐほさりぬべきあーりのとハ。ハりさゆありさうな辺のとハえ。○とゐの人ゆだよ志ーせば。とるんゆ。時く中垣のこいまみ侍るよ。ぞよ。とのき女どもゆ。きのげうえ侍りて志びらぶりのあのうどだうりひきのけてかーづく人侍るめり。きのふ夕日のころるくさー入て侍ーよ。ふ。ここくーとそ居みて侍ーー人のゆ。ゆそいとよく侍ーゆ。物思へるけそひして。ある人ーゆ女房共えも志のびてうちなくさゆ泣志どるん。志るくーうえ臣侍るときこゆ。ゆ。ゆ。ゆうちゆ志ーるひて。志ーバやとゆ。ゆ。ゆ。ゆ。怪光ハ。ゆ。ゆ。ゆ

ひをり」もハとの上
よまして源ハ志のあ
るべきいずんといふ
語を添て又るべ〜○
そのうきつゐでつ
くりいで〜」そのあき
ハ俗ツイシタン、つい
志〜と序をあ〜らへ
て〜○くちと〜」口
疾く〜○さう〜ぐ〜
のりち」心さび〜く
ありちん〜○ろの〜も
ぞ〜も志〜」草子地よ
りいふ〜評釈よかの
とハ雨夜の品定の時
る段ぶいひ〜をさ〜
ていへり、さてこれを引
出られしるハ、この雨
夜物語の脉をあらじ
てゞトつぎきる文を

孫ハざ〜んもなきけちくさう〜ぐ〜しるべ〜す〜ぺ
のうけひのぬ泊どゝて爲よ。ちほさうぬ爲きある
りれとハ。このまゝ〜うおぼゆるものをと思ひをり。
性光河
ゆ〜ふ孫へうるとゝや侍る。とそこのるきたいでつ
くり出て。せう身そこなとつの〜〜うきかきるれ
る志志そ。くちとく西るちどゝ侍りきいと
口をゝうハあらぬ人どもちん侍るめるとゆ
ゆれど。狂いひよれ。ぶ川ぬ志でハさう〜ぐ〜しう
ちんとのるふ。ちの〜〜ものゝ〜。とおゆひおと志く
志あひちれど。その中ゆ。思ひの泊のよくちをし





ホせるえ、とあるをさ
るとえ○ゆすひおと志〜志ゆひるれど」
見ハ雨夜のむ〜らの
門ゑ〜よあて〜ゑ〜、
二ホノ矛二節
あさ〜ゆ〜うつれ志き」
興さむるだうつ志
ゑきえ○ぐ〜る〜き
きのどくるえ○あ
やまち」彼の一夜の
とえ○いふう〜〜」
ホ番りえ○志ホぐ
の」中下の品え○くゆ
るく」あうるくえ○
うらもるく」あくそ
こるるくえ○ほれ
るくてゆあ〜ん」
志悔のつれるくそ
え○ゆ〜こるるこの」

あ〜ぬを又庄ほ志ゆ志ら。とめづ〜〜う和ゆ泊人
なり久見』二小段の第一節之。源の惟光よりタ貝を
たゞ（イカヾアラン）
さてゆの志評（作者たゞめて志評とあけり）のあさ泊〜う見なきをこの世ゆ
人ゆハ〜このひて和ば（保の）ゆ和いこのすゝゆ〜ゆ
ば。ぐる〜きあやまちそそ志ゆ〜ぬべきをいと
ぬ〜〜ゆ（嫉）ゆ〜ゆけて（貝）やうちんを。（保の）ん〜ゆかゝぬをるれ
し。ゆ（地）のやうのるゝ（逸の筋之）ゆすでふ和ゆ泊〜ゆ〜らぎわ
つるを。あるゝ〜ゆ雨夜の〜ゆさだめ志泊。いぶゆの
〜〜和ゆ泊ゆ〜ゆる志れぐのあるゆ。とぐ〜ゆる
くなりぬるぢん（ン）ありす〜。〜〜ゆなくまちゆ

先づ京極の人〇心を見果て後といふとも〇物目を移し思ひめしあひぬるを〇舟路のゆゑなりと云てを〇ろ〇やつれたる少し色黒く容貌の痩せ〇〇〇〇〇〇つ〇〇〇〇〇〇

事をも知りでありける人が羽をもつけて伊予の国をいとほしと思ふなるべし。○されば人の思ひ出でもなきに、源と元と名残なく思ひ出でぬと云へり。○今さらに思ひ出でぬるは、「つれなくもてなしたるものを今更に後ゆゑ思ひ出でぬるは、この歌づのひまつげ、げの歌づのひまつげ、とあるこの歌」をげ八重九重、後撰集にあり。さうもなき歌づのひのことの歌云へり。○ぬるきものの「嫉妬すること」残念なるものなり。○ぬるとも夫の去

とてだに。のろらのよ云へるもまぎれなくふまれ絡れのるとも

きぬ。まてよげなきことは思ひて。ゆきさらよみ

ぐるしこのるべし。と思ひ思ひかりしへ。されてうさきそのまた

云へておもはしうそれなんとも。いふこのひまく

うのるべきことは思ひて。さるべきをもしこの所いら浮へ

へなど。ちつこの容子のかたち

のひまつけうるこの歌。あやしうらうらしげに。カハユラシケニ

めとまるべきふしくさへなどして。衣とふ浮へ

ぼしぬべきへのりそひるれば。つまなくぬるき容子

ものくうきれぬきよおぼすを。いまひとつ歌ぞ萩へ

九号十二

のと定まるとも人へ○かへしこそ「お意しこそ」へ○とのくゆのへど上はきるべきへはづけてといくること、

二小ノ才三節

秋はもるるぬいとぐ物思ひのそふ附へ○へやうるるこそ「人よひるさるくよいあらでもあんすくと云きへ○ふづくしこ」花壺のことふ悔のとのふべんづくしこと○初も初け面向へ人を向くるきへ○うのあるへん等閑なるへへ○いとほしきのどくへ○されどよおるるこ云も悔うりつへ上

源氏物語　ゆふぎほ　十二

えぬしつくなるたぞそこびうちとけぬべくこえしさはなるをたのこそとのくきくのへど。源こくろもうごとずぞありける二小段の才二節へ。源氏悔初ばの萩を。

思出のふ折の。伊予介北上京せしを残叙せるへ。秋はもなりぬ人やはなちぞんはくしよおもはすこそありて大殿。夫の西殿へ

よハこを思ひおきつ。葵上うらめしうのこ思ひ出でぬへり。六条の。北源氏のをおもむけゆえのひてほひきこのへしるめるへん。源氏のいとほしこのしされどよおるきしはんまどひのやうよあれこちなるこハなきへ。いうする

のいとゝ〜うとゝ云をうけて源はさ〜も思ひさぬいのるるとゝこのとゝ〇よそひのほどもまげるゝ」源千七は自不せ四〜が多仰気ちゝとゝろん〇はよおれ」夜離〜〇おぼ〜ちをゝこゝとゝいとゝ〜ゝ」は息ふさ知〜ゝる思〜ちをるゝとゝ、ものゝけの伏案〜、

二小ノ才四節

ねふゝげ夜もをのら女のわとけざるし有よ源眠なげるけしきゝて殺きつく出るふゝ〇ゝそまつりおくりのゝとおぼ

とゝこのとゝ〜ゝ色〜ゝう。女ハいと物をあやうなるまでおぼ〜ちめゝる（源）ちんざ源ゝそ。よそひの程もまげちゝく。（せの）のゝりきこのんよ。いとぐかゝつゝきは（源）よおれのねぎめゝ〜おぼ〜ちをゝくゝとゝいとさ南〜ちゝり」（二小段の才三節〜。大夜の姜の上恨めゝ〜う思ひ〜。六条の（源息ふも）源のはゝうれをゝゝみ歌く歌〜。男のいとふのきあゝこゝくそ（女房タチ三〜）そのうきれのひそ。ねゝ（源）ふゝげるけゝきゝようちなげきつく出るふを中務の（源息ふの女房〜）おもとみのうゝ一るあげて。ゝゝそまつりおくりのゝとおぼ〜く。（源）凡帖ひきやりたるきバ。ちぐ〜（源息ふ）めたげて



ゝ」中務ゝ（源）息ふよ源をゝ迷ゝりのゝとゝいふやうをでゝ〇ゝをきゝゝて」過ゝゝくゝ〇ゝをゝをん色の」紫苑色〜表いをゝう裏ハ前黄色〜〇をゝりよあひたゝ」をゝりゝし秋まて紫苑の花さく物ゝれゝゝ〜〇ゝうちとけたゝぬゝてゝ」主の内ゝゝれゝばゝゝとうちとけぬ〜〇ゝのみのさゝゝりゝ」製の下り袴〜〇めゝゝゝ〜〜ゝ色」心外（ミグハ）ゝゝ〜〇ゝゝ〜花の色」咲花ハ主の女君、朝ゝ顔ハ中務ゝたゝへたり、ゝゝハ女君ゝゝへ〜の移ゝるゝふゝハ

又ゝ〜ゝめゝゝり。（ゝんざ）裁の色ゝ〜み〜ゝれたゝをゝ。（源）（ゝさき）やゝゝゝひゝゝゝるゝゝまゝげよたゝぐひゝゝ〜ゝゝ。（席）（方）ゝゝおゝゝゝゝよ。中務の君ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。（中務）ゝゝ色のをゝよあひゝゝゝゝ（羅）物のゝ。（裳）あゝやゝよひゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。（ウツクシウ）ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

つくみうくせども、折らでハ過ぐしがたき中将の今朝のうつくしき顔とゑ。朝霧の花を女君よりとりたりたりとハ朝霧の晴るまも待たぬ世のふけしきこそハ女君よりんをとめぬいぬとゑをくもとゑ。朝日やけども私のけさうをかざとも主君のとる取りなしたる。いとんきくたる中将の狩衣。袍よかくまほしげ侍童の狩の直よかきたくみゆゑ。心ちめもらぬ山ん山よ深て源を見まるとゑ。山ぶ山家人ゑ。花のうけ

源の蔭を花よりゑ人ていふゑ古今序よりたきぎおゑる山ぶつの花のあげよやちめるおぬし、氏河をおうゑして、狩といふゑ。ほどほど各〜名張ゑ。かしこちをしあらびゐ或いふいふびるくハるい女や妹を持てある人ゑ。ましてさうぬべきゑ。まして況やといふほどのさくさるぬべきハ狩るべきゑ。おとし物のハ俗ゑモノコロ、男女の情ゑ。おろかなる粗略ゑ。あけくれうちとけてし

中将物到て疾く家をよむん。

中将朝霧のそれまもまさぬけしきてそれをんをとめぬとぞうるふ。とおぼやけどもぞきこえなくをこのしげなるさふらひ（風流ん）（源の召連のゐる侍童ん）ハのをごこのまうしうとさうめきたるさしぬきの（殊勝）（指貫の裾）そそあげげよ。花のなのよまずつてあさぼらをりて糸（まる）ある袍などあくまほしげなりおほうこようちとなるんどよ。こころ志めをしぬいなすしのの（きまけ）丈情志らぬ山ぶ山ぶ。花のうげよいるほやそらいはすしきやこのはひ（源の）ありをこるなるうう

九号十四

源の蔭をよりゑ人ていふゑ古今序よりたきぎおゑる山ぶつの花のあげよやちめるおぬし、氏河をおうゑして、狩といふゑ。ほどほど各〜名張ゑ。かしこちをしあらびゐ或いふいふびるくハるい女や妹を持てある人ゑ。ましてさうぬべきゑ。まして況やといふほどのさくさるぬべきハ狩るべきゑ。おとし物のハ俗ゑモノコロ、男女の情ゑ。おろかなる粗略ゑ。あけくれうちとけてし

源氏物語　ゆふぎり　十四

ハ。ほどぼどまつけてくとぞかかる（情ん）と思ふ世をめをつ（源よ）あうまつらせなやとぬぶひ。ふくちをしのらびと思ふいうとなどのたる人ハやしきまても。狩この所あるうよさふらハせんと思ひよらぬハなすのりをうまてさうぬべきはいでのけことの袍ふも。なつのしきは氣色をうてまつる人の。きこしめくんを思ひ出るハいのぐハおろうよ思ひきこえんあけくれうちとけてしもおそせぬ狩。もとるきとよ思ふべうめり。二小段の少四節ん。朝霧の深きよ。侍臣ふの所より沼のふとて。女房の中ゐる聊れのふ狩ん。是迄を一大段の二小段とし。此段ハ惟光

小梯云、これいこの中
務などの能ものふぐき
ものごとと冊子記よう
いふえいとありけりと
なるき」ハ俗待ドホナル
ヲニヘ見ハ中務なる
ぶ思ふぐきさまあ
てく、地の詞ゑ文を
弦べるなり、

三ホノ才一節

ものことや」見ハ部て説
くなど云ふよおく詞こ
てそのことを思ひ出し
たるさまかくく
○怪光があづうり」夕
良のとハ怪光を仏ま
てあれバ祈りと云ゑ
○そのく」何人ゑ○つ
れ〳〵」心のボンヤリシタ状
ゑ俗たいくつのをゑ

よ夕良を名ぐたのれとつけのふい主ゑ所息ホハ例
の客ゑ。能きバ宮殿彩端萩葵上など祝あげたるふ。氏
務よ用なきやうちれど。作者の深き信きのめ〳〵。そそ
先づ怪光よ夕良を名ぐたのれとつけのふて。さて〳〵その音
伝を祈のふあひ名よ。伊勢今上りて宮殿ハ住れられて
源も思ひ絶ん人ハ務よ蜻蛉と学ひそ。せんまべるく
ふ。彩端萩ハ絶ん人と志ふさ海をあらハ。又葵の上ハ恨
ミのふとあるよて。ばよ〳〵つも絶まみちるる状をあらハ
し。中息ホハ中よのれを恨ミのふめれバ。源のみハ他よ数
きるるこなく〳〵一筋よのたるる夕良の方へかるるさ状よ
ハなせたを。さて中息ホのとよて中務と歌きのふ状を
るく〳〵かきたるハ。上ゑ大貳の尼君の病条を訪のひて中
ふを悩しのつる裏面なり。まことやその怪光があづうりのハ
ミ（案内）ハ。いとよく（怪光）あなハいことうてゆ。その人とハさう
よ思ひより侍らば。人ハいとうじくこのくれ忍ぶる
ゆ〳〵さるなん又を侍るを。つ（タイクツ）なるまゝよ。



○えひうゑ」ひえこの
よ出くるゑ○うくちち
ゑんほのあるれど」容
良ハ広ゑよゑたるな
れどゑ○いくらうた
げ」甚カハユラシゲゑ○
さきおひて」先駈し
てゑ○うくらだゑ」童女
ゑ○右近の夕良の
乳母のむすめゑ。まづ
ハ一番よと云ゑ。他
の女房よりも才一よ
右近よ昔る状ゑ○ま
たうくきおとれ
右をゑ○あるうま」
アヤカマシゑ○てこの
くゆあら」手掻ゑ
手をふりて制ゑ○
うちたゝだつもの」ホ
りよ打ゑゑ。なる廊

南

うたなみのたゝ半ずみあるなごや長屋よりきつく。
なの言をれバ。ゑのあるよこの主ゑ。
べる屋のめり。ゑちゑんほのあれど。
げよ侍る。一日さきおひてゑるなのゑべりしを。
のぞきてゑゑのいそぎて。右近の君ゑま
づものゑへ。中将殿こそ。ゑゑゑ孫ひめれ
といへバ。まよろ書きおとれ出きて。あれゑ海
と。てかく物ゑ。いのぞきハ知ゑぞ。いでゑん。と
てをひゑゑゑ。うちハ〳〵ぶれものを路ちまそな

源氏物語　ゆふぎほ　十五

下之○いそぎくる物ハ衣きぬの裾をを。
」急ぎみんとて来る
ものハ、右近の外の女
房ハ○うつゝぎのうみ
うつゝぎの石橋ハ一夜
の間よりけんと外の
誓ひしを夜明てと
たゝ〳〵てゞと云諺
を云へ、試橋ハあく
ちゝる故よたゝれて
後たりとゝゝみて女
の殺れていゝ我ハ○
ちゝゝぎ〳〵れぞ」ゝ
をいゝぶべきゝを、たゞ
ちゝぎと申ひとゝゝいい
ふハ○阪中将の」こゝ
ゝて始て中将とあゝ
いゝたり○小舎人童」
小舎人ハ童の惣名ハ
○ゝゝゝのあそれよ

ん（先屋へ）のよひをぐる。いそぎくる物ハ衣きぬの裾をを。
のよひきうけて。よろぼひ（倒）こゝふれて。そゝゝりも
後ぬぐけれど。いでこのうらぎのうみこそさの（峰）
ゝう志ゝあきこゝれ。とむづうり（腹立）て。ゝのゝゝぞきの（咀）
んゝのさめぬめり（與サメシ）ゝ。そゝたる（阪中将）ほゝ（直衣）そぐこゝて。ゝゝ阪中
どゝゝあゝこゝゝ。ゝよぐゝゝれぞゝとゝぐゝへゝい。（童女の）
阪中将の（ゝゝじん）ゝゝこゝゝ（小舎人童）ゝゝゝゝ阪ゝん。志る（証）
ゝいひ伝ゝゝ。ゝど少ゆれば。（阪河）ゝゝゝゝ（中将の）ゝ
をゝゝゝとの殺ひて。ゝゝのあそれよゝゝれざ（擾）
ゝゝゝゝ人ゝゝゝゝとおぼゝゝゝゝ

三小ノ才二節

その中よりて」花も面夜の物語よりさびしくあぐれたらんむぐのかどよ、思ひのあるよりしげるもんの人のとぢられぬるもんそ恨りるくめづらしくおぼえめ」といひしをおぼしあはせる秋人○おの事もくまるきを思ひ紀ん」と」惟光もきのさぬ好色いまそ人○たがおりまどひて」源の内命のまくよ夕自よまそせをんと謀りていづきありくん、

三小ノ才三節

引るとすくやれのひつ」めつさくよ姿を源人ありまそ。やどれるきまひの程を思ふよこれそのの人のさがめあるづつ慢。きの志れるくめそのやよ思ひのねよをすくきとのあしぶなどおもはれなりけり。惟光いさくあのの隈のれもくあなのきを紀んすていくくたがこのうまどひありきつく志のびていおそくいいいまさせそめてけりこの程のとくぶくければ例のまくを川」三小段の第二節人惟光夕自をあがこのう成しける秋人ぬおふ志のびておそくまさせそめてけり」といふ一句まく事の成就しける事を志めぬ。世程のとくぶくければ」とるざと思びのふ秋のくぶくさを省きて弦びたるいいとめでたく。夕自を女をさいいてその人とぶよいで弦をねばうれもなの



やつくのふ人○おりくち」車よめさだ下立てありきのふく○引ぶうまを」惟光の馬をば源よまりてく○けさう人の」小櫛よ人よ繋想まる者八多を物くくく兄まることるよかく歩行まそのげなきさまをえられんかきことたらふれてやくとあるよろく○ほむげよ」顔を一向よ知らぬ童一人○とおりよ」大貳の乳母の家人○内つのひよ人をそ人」源よりの内使よ夕自の方よりを人を源てやりて源



いを志のそでいとよ見るやれのひつ。伺るうぞおりくちありきの弦ふい。おろこのふおぼさぬ欲供べくとられば。惟光がこのうまをばそてまつりて内とも。よそくとありくけさう人のいと物げるきあり。惟光河と知。先方まそうけられて侍らん時。うくくもあるべきのる。ところふれど人よ志せるふぬまくよ。源氏のの夕の母の志るべぜくく陸奥だうさそいのほむげよ志るまくきこくハひとりばのりぞみて卒おそくきる。源氏と思ひよるけくきまやとてとるうよ中やどりをどよくるば。夕自女もいとあやしうんえ

ぬんちのこゝてぽつのひよんをそへあのつきのこ
ちゆうのぐをせぽあ住所りのこゝせんとこゝぬれどそ
こはのとるくすどいゝつくさをのよ表よこでい
えあるすゝく。夕皇ぎのこのんのぽんよかゝりあれば。ぽんぽん
るくゝるゝゝきことゝもおもゆゝこのゝゝびつく。
いとゝゝゝゝ夕皇の表ゝ知ゝゝゝますんゝのゝゝるをぢはまめびとのこ
ゝるくをりもあるをいとめやをくこゝめるひて。
世の人のとゝのめきこゝあ迎べきふるまひゝ孫をゝりつ
る紙。あゝゝゝゝきすでゝけさの程ひるまのへゝそゝも
おぽつゝるくなど。見ひゝゝづゝれゝまへゝばゝヒトツのつ

のゝゝそゝもおぽつのゝ
ゝ今朝(ケサ)頃りてタべハ
おいもべき、そのひる
のあひゝでもまち
とをよおぽをゝ〇い
とやんどゝるきゝ」甚
ゝきゝんはあるすゝ
とゝ〇はゝ始めよ女を
さゝてその人とた
ゝゝ出給ゝゝゝバゝ」
とあるハ源も夕皇も
互に疑ひつゝ逢のふ
さをまて、これ変化
の伏案ゝ、

三小ノ第四節

むゝゝゝあゝとゝんゝゝ」
諸抄ゝゝを三輪明神の
故事を引けり、さて
こゝまゝゝゝめて変化と
書出たるゝれど毛下

ゝいと物ゝゝ狂ゝゝゝゝゝ。源ゝゝゝゝでゝとゝゝむべきゝこのさ海
ゝゝあゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ

の何ごゝの院の妻
仏の段より思あるそ
尾まゝ、その伏案之〇
うゝて」このゝもぐゝ〇
淫ぞうりまこのハあゝ」
何ぞゝの位のゝ人すんと
ゝ〇狩このもきゝの」ヤ
ハリ氏の好色の性光の
ゝ〇あいふ」大夫ゝ、性
光氏同五位なれバ大夫
といふゝ〇せめてつれ
ちゝ」性光ハ志ひてな
るゆげなくゝ〇やうた
ぶひゝる云」熟考の
けさうとハるぶゝの
遠ひゝる物思ひをも
るとゝ、

三小ノ才五節

かゝくうらなゝ云」夕
自ぶかやうよおくそと

どゝまゝへバむこうゝ
ていうゝて思ひちげの
ぐ思ふも志るきこゝ
らん狩このもきゝの
いふをうゝぶひちぶ
ほゝて。のけゝ思ひ
れありけぶ。いのな
ぶゝもあやもうや
ける

いゝあり兄ゝのいゝ
て。人のけけゝひゝ
ぐ思ふ。ぶ
ゝ。いでつる思ざ
ぶ。せてけれちゝ
ぬゝ。ゆまぶあざ
るとゝのとゝろえぶゝ。女

三小段の才四節ゝ。源夕自のゝとゝ通ひのふ状
を叙せり。氏ふふ自をこのゝのほをもほのこせたま
ちぶ」夜ふふきほどゝ人をもづめて云ゝ」
るどあるふ。これ皆妻仏のゝを叙を伏案之。

十号四

源氏物語　ゆふぶな　十九

もちゝく、ゆぶんせきもせゝ
ゝ〇ハひゝくれちぶ」ゝ
げ隠れて志ゝうた
るらゝ〇おひまどゝ
」ゝ狩を逐ひ惑ふゝ〇
なのめゝ思ひちゝつ
ぶゝ」女のりゝすゝな
りても、大ゝうゝゝおぼ
されぬぶゝゝゝ〇さゝ
もぶゝてん」逐失ひ
てゝれちゝゝおぼされ
んゝゝ更ゝおぼされ
ぬゝゝ〇狩ゝれゝすゝ
て二条院ゝゝ」夕自
をゝゝゝ知ゝぜぶゝて
二条院ゝ迎へんゝゝ
〇さゝゝゝゝきゝゝこゝを
狩ちぶきゝ狩郷ゝこゝを
あゝゝめゝ〇ゝゝゝ志む」
くゝゝ思ひ深むゝ〇

なくたゆめてぷひのくれるぶいづこをたゝのりゝとこのゝ
れもゝづゝん。夕自の住居ハ人
れぶ。いづゝのゝもう川ろひゆゝん日をいつゝゝも志ゝじ
とおぼゝゝゝ。おひまどいゝて。なのめゝ思ゝゝぼべ
くハ。ゝぶかゝゝのゝゝゝゝもゝぎぬべきゝゝ狩。
ゝゝゝゝゝゝゝてんとおぼされぶ。ひとめをお
ぼゝてゝぶゝおきゝ隔置ゝゝゝゝ夜ゝゝゝゝゝゝゝ

いのるる契」いのるる前世の宿縁であり
けん〻○ふぜんもきゝ給
安んるるふそく○
のどうよゆえん」四
るく物語りせんとゝ
○よづるぬゝ」よの
つるのさまよ似つる
ぬゝゆく〻も知らせぬ
ゝば秋をもゝせるえ
ぬをいふ○げよりづ
きのきつぬるゝんを
たゝひよゐのりを志
のゝぬるど上よあれ
バげよどちゝの狐なる
ちんぞとゝ○さるあ
りぬべゝ」ほのめゝゝま
ふをゝくよあんとゝ○
よまるゝくこのふるゝ
んとゝろり」とゝ」夕貞の

なぶゝいとこのゝ人〻よゝむとはるきをいのるる契
りこのふありをん。ぞどおかは〻よる。いざいとゝや
すきふるそのどうよきこゝえんるどうゝゝひの人
で。夕貞消なはあやゝゝうかゝのの人〻どよづるぬけすれ
るれバ。のおそろゝゝくゝゝそあれ。いとゝるのびてい
へで。ほのゝげよとはゝ合るれるひそ。げ羽よいづきるきつ
ねをゝんなゝゝぐゝをゝゝれの人〻ゝ。とをつゝ
ぐよのの人〻で。夕貞女もいゝゝぐゝなびきてさもなり
ぬべゝ」ゝひたり。世よをゝくゝるふるゝんゝとをを
とも。ひゝゝぶるよをゝぞふんゝいと表げなる人と

十号五

なぶゝいとこのゝ人〻よゝむとはるきをいのるる契
りこのふありをん。ぞどおかは〻よる。いざいとゝや
すきふるそのどうよきこゝえんるどうゝゝひの人
で。夕貞消なはあやゝゝうかゝのの人〻どよづるぬけすれ
るれバ。のおそろゝゝくゝゝそあれ。いとゝるのびてい
へで。ほのゝげよとはゝ合るれるひそ。げ羽よいづきるきつ
ねをゝんなゝゝぐゝをゝゝれの人〻ゝ。とをつゝ
ぐよのの人〻で。夕貞女もいゝゝぐゝなびきてさもなり
ぬべゝ」ゝひたり。世よをゝくゝるふるゝんゝとをを
とも。ひゝゝぶるよをゝぞふんゝいと表げなる人と

いざゝゝんたとゝよゝたぐひるゝゝみぐゝゝき
ゝあゝりとゝゝ○所中
ゝのとゝゝゝ」西夜の
ふ定よ、中ゝの語ら
れしゝゝゝゝのゝよみ
しゝゝゝやゝと疑ゝゝゝく
ゝゝ出めふゝゝ人○あな
ぐちゝゝゝ」強ひてゝ
ん○気色ぐゝゝて」き
もちをゝゝせてゝ○ふ
とそむきかゝるべき」
急ゝゝげうゝれるど
きるゝゝざゝゝ人○ゝな
ぐゝゝゝ」ほのゝゝゝな
ぐゝゝゝをきてゝ
きゝ人〻きこゝゝてゝゝん
のゝゝるゝとあゝゝん、
表ゝるゝゝそあゝん、
とゝまでゝゝひのゝ人、

ゝゝのふゝゝ。なゝほゝのの所中ゝのゝとゝるゝゝゝぐゝはゝゝく。
ゝゝ中ゝのかゝゝゝゝ

四小ノ才一節

めさめて目醒〇ありれいとさむしや〇あゝ甚きいとさむしや〇なりそひ家業〇ぬなるのの〇ひ田舎の通ひ京より田舎へ行て商ひをする〇きさどのこそこそ北隣の人を呼びあけて壁ごしに物語をするさやう〇あのゞ兄さのいとをくしはめれそれくの家業よ〇そくめきさるくゞもけどるきやざを〇強くも間なく近きものを〇えんぐちけしきえもん人山夕白の天狗大やうなる月のげぴ陳ますおほるいくや絵をなくのりきて。漏

うるくひのふぬをのさはもめづらしきく。

嗤ちいくいるくいるくるくるべしとうりの家く隣

あやしき志ほのをの彦〇〇〇〇賤夫

いとさむしや。とこしこそなりをひるも多のむ不

をくれく。ゆるのれるのひもいひうけるばいとんぼ

そけれ。きこどのこそきく孫へやるどいひうえん

もきこゆいと衰るおのうぎくのいとるみよ。お

き出そくめきさるぐもほどなき狗。夕良女いとを

づうくるひくうり。艶えんぐち氣色しきもんん人いき

十号六



拙くぞうだちある人るくばほよ弟して消へたくえづうき住居のさまるんとく〇ゆひいれたるさまるくで深くんゆ死をるやうをもるなくてく〇ゆくくえちかがやうんくりは隣の物ををなるくくえぢて赤面ちどをるりはつくちくくえゆくと兄はタ白のか上をえく〇ごほくくと雷のおとく〇蜻蛉日記よも神ごほくくとる〇かうくのおと柄確く農家まあり〇まくくらうみ源の枕上るゆゆるく〇なるよ

えもいりぬべきを侍居のさはなめりうつ。されど夕良の侍くどのよつくきもうきもうくいくきとも。ゆひいきたるさはるくゆ侍。ゆてるゆりさはいとあて品いのよくめくくて笑止ナルくるくらうごそくきとるりのよういたるさゆいこのるくとくもきくたりたるさはるくゆばゆくをぢかくやうんくりはつくゆるされてぞうんえけるゆ用意ゆくとるる神くりもゆどろゆどろくくふくとぐろのくおくうをのおとも

まくくらうみとおばゆあれみくめくおまくとお

れるぞおばさるく。なるのひぐきとゆきくいれ

アドケナク　ヤカマシキ　ヤウス　ケ氣　艶　夕良　夫　賤　隣　漏　夕良

のひぐきことゝもゝゝ」甘柄雑ものなれのゝるはバ源ハ何の響とも知りぬ〇ゝゝろたゝの衣うつゝゝ」白檀の衣〇ゝのびおなき上」表れよたゝへのあきゝ〇りろとゝもゝ源と夕良と一ふゝ〇狩るきゝ屋ゝ」庭の狭きゝ〇ゝれたるゝれ仏」外ハ風致あるものなれバゝゝやれたるとゝゝ〇ゝのゝの中のきりゝをだゝゝ」源の者ゝ位のふ殿ハ度くゝて、壁の中ゝ鳴く蟋蟀でも、間遠ゝゝゝの人るを、ゝゝゝハ狭きなゝ中耳ゝゝゝあてたるやうゝゝゝきめふとゝ〇ゝんぞゝひとつの云云」源氏志の切なるゝゝゝ、ゝる堪ゝゝゝのふとゝ、

四小ノ才二節

ゝろきあゝせゝ」白き袷ゝ紫の房色の表着を着たる〇なゝゝゝ」なゝて楽らゝなるゝ〇あるんぐるゝゝ」夕良のゝゝゝ

どうしてせんきうなら
んと○この世のミるら
ぬ方〻」未来までを
契るこゝろ〻しのふと
下の弥勒を引たるゆ
ゑ聡明○知なめの
しかぞ〻ら〻」女房
達のさまと女房のい
ゑ知ぬるすく〻思ふ
すの〻主の夕自の面
めを思ひてたのみを
かけてよろこぶさまと

四ふノ才三節

あけぐたもろ〻」上ゑ
才一節ゑ晴ちの〻ふ
りゑけるるべし」と
あるゑ尾人○みさ
けさ〻じ」みさけハ吉
野金峯山とその金峯
山へまゐるとて、千日

るれば。（係結）いざたぐせとうちのきふよ。こゝろやすく
てあるさん。（夕）のゝそのミいいとくるゝ　ありけりとあ
ゝへぞ。（夕）いのでのまいおるゝんといと　おいゝこのゑ
いひてみゝうこの世のいるゝいいいいなどま
でいふのめのふゝぷちとくるんぞへなどあやゝく
やうあたりて。（男到）よちれたる人とも笑えるばゝ（女房）のお
もそんゑもえをぐうり孫をぐ。方近をめゝ出て。
陪身をめさせのひて。（係の）車ひきいれさせのふこの
ある人〻（女房）もかゝるゆんぞゝのおろうるゝぬをゝれ
ば。おぼあゝなぐゝるのゝ紀ようけ才をたり

（粗畧）

十号八

四小段の才二

の精進をおこるふゝ
○なちちみのけをひ云
云」老翁の起ゑゑ堪
へ難き状ゝ○ゆゑもさ
うらんのぐうゝ云
云」當来ハ未来ゝ導
師ハ弥勒のるゝ○こ
の世のことハ云」行者
も来世を頼めば未来
の世といふとハ必あ
るべしされば弓中も未
来の世まで契らまし
とのゆふゝ○うばそ
くおの方」優婆塞ハ
俗なおら仏弟子よ
へゝ人ゝ行者をいふ
ゝ、ゝハ行者の行ふ道
をゝろゝべゝて未来の
世も夫婦の契りを
遠ひのふゝをゝ○長

節ゝ。ダ自の上の（係和）上并ゝ形容状叙也。あけぐ（いい方）ごゝもちのうたいいいいけ。
とりれ歌ゝすどいきこえで。みゝうけさゝうじ（精進）ゝ何
らん。ゝぐおきゝ（翁メキ）びゝるゝ。ぬゝづゝぐ（突額）ゆゆる。たち
みのけをひゝへぐゝげゝおゝゝふいと長ゝあゝゝの
家ゝとゝゝぬ世を。なゝをゝ（貪）むさぼる才れいのゝゝゝ
あゝとゝゆゝのゝゝふゝ。ゝ（南無当来導師）ゝゝらんのぐゝゝゝとぞをゝむ
ゝる。（係句）のれきゝゝゝ。この世とのゝをゝ（行者もゝ）もハざゝりけ
わゝとあゝれぐゝ（アラン）ゝ。
（係）うばそゝくぐおゝとゝるふゝ乃をゝゝるべゝてこんゝよゝも
ふゝきちぎゝるをゝぐふゝ。ゝ（ちぎれ）ゝ生殿（奮）のふゝるきたゝ（例）ゝた

主殿の司」白氏文集の七月七日長生殿夜半無人私語時云々の詩を引けるゝ玄宗と楊貴妃の契りハ末をとげざれバいまハ〜とゝ○さきの世の事」あの主ハあの世の因縁つたなければ今生もめ氏るゝめ氏の因果まてハ未来の世九たのみおくゝとゝ、

四小ノ才四節

いざゝらふ月よ」入方ちかのけれど入らぬ月ゝ○ゆくりなく」不意まゝ○あくがれ」はなれをたゝれ出んとせるゝ○のろらのよ」夕月を

ゆくゝくて。在天願作比翼鳥トあるを云ぬをうはさんとはひきかへて。孫勒の世をぞうらやむ。ゆくさきの世あはめいとこちたし

さきの世の契ましるく多のうさもしるゝ多ぬ

てゝのゝがゝさよ。此かくふるむひきすどゝ赤熱らゝくゝあるとゝ

ろもとるゝめり」四小段の才三節なり。はれを五條の晴の景況を叙せる。

いざよふ月よゆくゝうるくなくゝのれんとゝや。如月の

猶強

ひやをゝらひ。とゝくのゝさふ猶よ。にをゝのよ重ゝのく

れてあけゆく事いとをゝ。不都合ノ時ハ

たゝきはどよたゝぬさきゝ。と例のいそぎ出るひて。おろら

のゝうちのせゝゝれた。右近ぞのりけるゝそのを





源のいざきてまのせのふゝ○はるのの院」融公の河原院を准ど云る説あり。はるハ源の別荘のさまゝ○あづのり」はるの院の面あつのりのくゝ○まぢかやうなるとを」源すゞめはるを志ならゝぬのゝさてゝ。くゝあるゝとゝで。あるヂヤナアゝ直ゝ。ゝくゝ。ゝいまゝ一つの家」著物語すどゝ女をぬをみ生して。ふくゝゝきハめはるゝゝゝやゝ。あハまゝぶ志ゝぶゝし。ぶ今ハ人ハくゝゝまどゝるゝとのをゝ

ゝうちのきなるゝぶゝの院よおをゝゝまゝつきゝ。あ

づうめゝいづる程。あれ。はれ。あれ。変化の物ある伝説之るゝのゝどの志のぶぐさ

志ゝげりて。ゝゝあげられゝる。あとゝゝへなくゝこぐゝし。木蔭

雨もふゝく雨けきよ。車の簾ゝをそゝれをさゝあげゝるゝへ

れバ。紐もいゝうぬれゝぬれゝゝゝ。源河すゝぐゝのやうなるとを

をるゝふぶりつる程。ゝろづくゝなるとゝ。

ありけるのれ。

源

いまゝ一つもゝくゝやゝ人ゝのゝまどひけんゝゝぶゝまゝぶ

志ゝぬ志のゝくゝのゝゝ。源夕白ゝ向ひて

女ゝぶらひて。

○やまのこれの家」山のもを源よたとえ月を家ましたとつぶ源のりまのんもちーでのくぶひゆく月八月のげのまいうよをうくるめく、途中まーてをふれやうせん、と心細くもひのもえさるハつひさ女院まてうせるふ前表のめくかきをーたるぶいとたくみえ○おのをーつとびたる」せぶき布よををこうけたる男ひならんと源ゝよ夕鳥を笑のふさまえ、

五小ノ才一節

ーのだ名ゑ」何ぶ

ーー院の西の方なる對

やまのこれこそもちーでり月いうえの家よてうげやーさえちん。ころぼそくとて。物おそろ

凄

ーうまぞげよ思ひしられ。おのさーつどひ有ある

五条の右

ををのるのこころをうちひるんとをこのーくはぶぶ

源のんまえ

四小段の才四節え。月の入うこのけーき。夕鳥と源と何ぶーけ院へりのふまでを叙せり。をまでを一大段の四小段とん。さて女段ハ五條ちこうの月夜のさまをるぶ家よさもと思ちるくぶのうえ。法尾ようて。何ぶーの院のあれたるさま院。外面ようーるすよむづのーしげちる秋を。次の段ハ内のけーきれ荒きたるさまをかき出て。女段をよむ人のハをこ。をぶげよおそろーうぶをたるハ。変化の出づべき法構ハ。ーこまやのすりといふ。源車いれさせてくーのだ以よおそーちるどよそふ風ど。ウ欄ろうらんよ内をひきあけて立のへ宣。

座え

十号十

屋え○気んちるんち」右近ぶ源の待まよ姿を艶ありとえる秋え○けんめいー」河海よ経営とあり○引の源ある板」あづありぶ経営して歩く秋をえてたーうよ源氏の夫えと右近ぶ知りたるえ○風のぐと」上の刻かくれて時西くとあるそ尾え○内とものんかるえ」何ぶーー院れ人少ちる物をぐき秋え○きるべき人ちえ」知るべき人名ぶべきまやと源え何ふえ○陳の西ちなど方」家司より取あんぶ内粥ちどたそまりた

右近えんちるんちーてきーめ既往のとなどもえ志れば思ひけり。あづありいらーぐくけいめーーあり

ありさま

く氣色よこの内みえ板志りたそぬほのくいと物

車より

いふゆるほどよ知りめひぬめりそめなれどき

ありの何

よげよ志つーひあり内とるよ人ものさふーハざわけ

弔侍

思ふびんちるうぶざれとそむつまーき志ものげいー

下家司之諸大夫之

左大臣殿

よそとのよもつ内出への者ようまつるものちりけれバ。ありよ

りてーさるべきー人めをべきーやなとやーさそれど。

源何

とそーうよ人くそーぶ紀ちくれ乱ものとめたるなり。

さーにんよりあるまめーをなと口ぶーめさせのふ。

れどゝ○とりつゞけ（トリツヅケ）ぢまの人立合ゞとゝ○ねきゝるゐ川と」引あゝ方
暮まゝ引ほ名のあきるゐ川ハあゝぬとゝ又
まかゝらふとゝきめや山はあのんをとれ
り川ハ近江の坂田郡よあり、まほゝハ俗カイツブリトゝあゝ、

五小ノ才二節

人めもるく」人ゝ見ゞ
ゞく○秋のあゝまして」
引あゝ孟津よ里ハあ
れて人ハふりまゝ宿
るれゝ夜ゝるまのゞきゝ
秋のあゝまるゝ」はまゝ
○ゞちるゝ」別納ゝ別
ゝ建たるあゝ又小寝

ちゝの田ゝるどいそぎゝ糸ゝせゝれどゝとりつゞけまゝ
のゝるひゝちあゝず。まゞゝぬゝとゝるゐ旅ぬゝ。
あきゝ（ゝるゞ）ゝ川（ゞ）と契ゝまのふゝりほのゝとゝるー（五小段の起）
第一節ゝ。源ゝよりゝ下りのひて。月の景色ゝるどゝのふ拙ゝ。日たくゝる程ゝ拙きゝる
ひゝて。ゝゝ（格子）ゝゝゝあげゝゝまふ。いゝくゝあれ
て。人めもるく。ゝゝ（廣く）ゝゝとゝゝゝされてゝゝぶちいと
うゝ（ナツカシゲナキゝ）ゝくゝのふゝたり。けちゝ（気近）ゝきゝ（きき）ゝるゝどハ
ゝゝゝふゝるく。みゝる秋のあゝまして。池ゝゝく（水草）さゝゝ
うゞもれゝまゞバ。ゝとけゝゝとゝげゝ（人気疎ゝ）ゝけるふゝるゝ。ゝぢ
ゝうれゝゝゝゝゝるどゝて人ゝゝむゝゝのめ



殿のゝとゝ、といふ説もあり○ざゝゝゝちどゝして云ゝ」曹子（ザウシ）ハ部屋ゝ、
ゝ曹子ゝ祭りの人の住めるゝゝゝ○ゝふ
家ゝの家」ゝゝゝゝハ道
の「冠字ゝれどゝゝハ
ゝのゝゝゝいゝり、ゝハ
源ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
今覆面の血を解きて
あゝゝるハ彼のゝ白の
布を面ゝゝけゝゝ
より縁とゝゝゝゝゝ
ゝガマアゝ○家のひ
ゝり」んあゝゝの家を
うけていゝゝ源氏れ
て云ゝゝゝ俗サア素顔（スガホ）ハトウヂヤゝ○
ゝりめゝ」ゝハゝ白の御
まゝて芳のふゝまゝ故

れどゝ。（西蔵ゝ）ゝゝゝハゝれたり。（源河）けゝゝゝゝなりゝけゝふ
ゝれ。ゝりゝゝゝゝ鬼ゝゝゝゝゝゝれをゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝと
ゝゝふ。（源の乳）ゝゝゝゝれのゝくゝゝゝれど女のいゝつゝし
と思ふふべきれバ。げゝ（車）ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ（遠）ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゆふぐれと源を待ち見よ
そのもとの〇ひかり
りあり〇の家に主人光り
みとえくさ夕顔の上家
のめき源の顔はうを
ぐらすぎれの見物下
ヂヤ光りゆるいものを
と思じていふ〇あま
のこゑれば引家へ朗詠
よ白波のよせる渚く
世をつくえ蜜のよるれ
ば夢もさめぬべし」のこゑ
〇引れもこ引家へ古
今よあまのゐる磯く
もむ虫のこれもこと
をこそちのめ世をぶ恨
こ」とあを取て家の今
をあらはきぬぬ夕の
りのをぬもとをりと
源の見ひるふさもこ

しるん。げよ打とけめるべるさ海世よ（上の夕顔の家を受て云）（源の歌）なくふのこまいて
ゆくこきまでこええのふつきせびべぐそめるつこさ（イマハシキ）（夕顔の隅へ）（源有）
よ。あこふさごとと思つるものゆいるぐうよ名のこしめへ（覆面を解ずこと）（源顔を見ハーたれ夕顔もちのれこと）
いとむくつけこと（キミガワルイ）のへどあまれこるれをとそ。さ
まそのようちとけぬさまいとあいぶれこりすこれ（アマエタル風）（源有 マヨ）
もこれるこなめとこうこみるつはるこひくこし
ふ。惟光あづ（集）ひ夕顔こ。ぼくぐものなどまるこ人。
右近がいそんと。さもぐいとけれで。（源座近へ）（キノドク）ちのくこも
えさふこひよこ。（源の）ぐまでこどりあきのこふの
をこのこうさもありぬべきさ海よこそいと。（女の）（惟光 推量）（アレ）



〇右をがいそんと」女
房のとはかとは惟光が
謀こことなれば右を
ず恨こいそんと云、惟
光はこのぐくよ見ひ
て近ここぬと、

五小ノ第三節

ここ〜へなく」たとへ
んこなくこ〇そひ
ふ〜」寄添ひて郎を
こ〇夕だこ」夕映へ夕べ
よなりて日よ映じて
物のをこのこくこゆこ
〇あやこきこふぎこ
〇ちこたこ」カハユラ
シこ〇つとけうくこ
よこちこうりと源の
傍よ寄添へ〇引のう
んぐこ」夕白のとこ
ろうまて日源の庵く

ちこくこも。惟光のよりひようて家の人とこ思ひこせんと思ひこ（源）きこ
ふいとよく思ひよりぬべこ申ここを。（源）ゆ
づりゆ西こ。（あるべこ）ひろさよちどめぎ海こうぞ思ひを
る

五小段の第二節こ。何ぞ一路の景へ源始めて
覆面をとりて。夕白とのどこのこ源ちひのふ状へ。
ここ〜へなくこ志川のこるゆこべのこをなこめ孫ひ
て。奥おくのこいいいいいいいこ（キニクハヌに）ちいくこうものむつこいと女いこ思ひこれ
バ。源こ
このはここ。女も（夕顔の）こるありさ海を。思ひの泡うよあや
こきこ。（◎）ちきこいちいこ志こるぐここよこ川のなげきここれて。先
こうちとけゆくけこきいとここうここ。つとけあ
たいこここそひくここして。物をいとおそこいこと思ひ

てさびしきけしき殘
ろ〳〵ごろを、源ぎき
のどくよ思ひのこと〇
御ほとをぶら〳〵大殿油
と、燈火のもと〇名殘
なくこゝ〳〵夕貝ハうち
とけて思ひ殘ぬやう
をもなくなりたるを、
やり戸の外ぬハつゝ
と源ぎ恨みのこと
〇の川ハあやしのの
カタデマニハふなぎの
奇怪の心もとと〇な
よいもなきさゝむあ
ひ」源と夕貝とをゝむ
ひと、細流ぬ夕貝の
ぶりよ御ほどけたる
と、源息所のお解ぎり
を、ゆづろへときと

いいふさ海。幼子のうんぐるゝ。格子とくおろしのひて。御ほとをすぶら〳〵まゐしせて。源氏名殘なくなりよたる燈まて。なほんのうちのへぐそのこゝのへるなんつゝきとうゝみのふ。源の名内裏ちいのよもとめざせのふらんを。源使ハいづこよ見ぬもんとおぼゝやりて。のりハあ。やゝのゝや。源息所をさそこそ六條ゝとうまいのよおもひうぐれたまふゝん。うらみられんもくるゝうとうなりと。いとけ。キノドクナルきさきぢハまゐ思ひやるのふ。夕貝のなんもなきさゝむあひを。源名れとおぼそやくよ。源息所のあやりんふゝく。うる人ゝくセツナキゝきたる頼を。きこゝとり



源の思くゝめるふゝ、あやうよ思ふ後りをえて、実ゝ通ぎるまやとあるよろゝ、

五小ノ弟四節

ゝひきぐるほど上よ
ゝく伏葉を置一変
化のことを終ぶ幼ゝ
ゝ、文法の入題ゝ〇と
きめゝ」時を得ぬ今
むるゝ愛ゝめふまゝ
〇いとめぐゝく」
甚心外ゝ〇この内の
ふゝうの人源の傍よ
卧たる夕貝ゝ〇ゝもも
きえまゝり」姫ゝ
〇ゝて」ゝ人ぐ
ひゝんなとゝ〇ゝち
おきのひて太刀を抜
て枕上よ置ふゝ〇

五小段の弟三節ゝ何ぞ御
ゝ物いとおそ
ゝ院中
ゝ変化の伏案ゝて院中
宵過ぎくる頃どよ。ゝ
ぬい
ヒョンナゲ上ゝ
ゝみゝいとをうげする女ゝ。
源の枕上ゝ
ゝ。
ゝ見ぬをば。ぐよ
ゝ
ゝ
ゝ

そろそろ」紙燭を○さしてまゐれ」紙燭を火を付て参れといへ
とえ○くらうてといへば」聞くそ思ふ
とおもをぞいふえ○
あれ」とのゝ〳〵」源右近をアヽ若輩ヂヤと
笑ひのふえ○山びこ
こゝふる声」山まそ鷹
ふるを山びことといひ、
林中ま鷹ふるを和魂
といひ、天まて彦
を天彦といふ皆同物
え、世ふも奥すりたる
殿中ちどまて、声の
彼ふま響き鷹ふる
を云え○うとまて」
親しむの裏え俗イヤ
二思ハルいえ○引れ

ぬきて。うち乱のひて。右近をおこしのふられもお
そろしと思ひるさ海まて。傍へまゐりよれりつこと
殿なるとのゐ人宿直起おこして。おそくさしてまゐ
といへ。とのゝへだ。右近何いるでゐやるん。くらうてといへば。源何あれこの〳〵とうちこゝひのひて。まをた
き孫へば。山びこのこゝふるこゑいとうとはゝ人キニイラヌ宿直
ハえゆつけて。糸こゝぬよ。この女夫戦慄夕良いこゝぐこゝろく
きまどひて。いのさ海ゆせんと思へり。あぜも志とぐよ感ドヤウニ汗シトシトと
なりて。られの氣色なり。右を何オソレ物おぢをれんこりるくせき
せのふ海布上まそ。いのよおばさるくよ。と右近もゆ夕良ウマレツキ





この乳母」乳母のくるのもれこゝろもきをいふえ、休言まして云え○引さ殿の火もきえまけり」上ゆ火も消えにはまこゝ殿の御火も消えくるさゝをいふ〳〵物をぞき物を照らえ○つるうちして」弓の弦をかるゝせとえ悪鬼の恐まくなえ上ゆ刀をぬきて」とある照らえ○こゝづくれ」強く声をあげて人あるさまをもあらえ○怪光の影五三〻」今夜この殿五の五会いざるく強及まあるそさこゝぎのふるをいそん先弱ク

ぬ。源何とあゝくてひるもをれこゝるもの御。キン
ほ〜とおぼ〜て。何られ人をおこさん。まこけぞやま
びこのこゝふる。いとうるさ〜。夕良の傍ニこゝゆ志づ〜ちのくと志ぶれて展
て。右近をひきよせ〜まひて。ま〜れつゝ戸よいぞ。
と強おゝあけのへれば。いゝ殿の火もきえよりり。
風まこ〜いゝうちふきこゝるゝ。人をくるくてさふう
ぬこのぎうこれ寝ろこの泥のあげうのこむつ子え
ま〜くつうひのふこゝるきをのこぞこゝ上へこゝい
ひとり。例の強乳母だろうぞありけるめせば所のこと一人
へ〜ておきこれば。源何紙燭トモシテまゐれ泥乳も

とそてるぐーとある
評釈の説如なぐー○湖
口なるをけれ心あ中の湖
口といふれよ作ふ武
士之寛平内時より置
うれーと拾芥抄ふ之逆
たり○ゆづるゑ「湖
口の武士弓弦を似せ
ふいーく打鳴もて之
○火あやふー」俗火
の用心と云と同之、
火危と警呼ふ之○内
をおぼーやて」内裡
残思遣りの之○多
ぐいめん」於ち中まて夜
の一刻より内豎時の礼を
奏を、之時宿直の侍
臣、互よ名を問いれて名
のるこ、世ゆよ湖口のと
のるとあり是も名

つういいもてたえびころづくれどおぼせよ人を
離
なれたるみよ。ん（気をゆーてん）寝とけていぬるものの。怪光の朝臣
のきたりつーんいとときせのへばさふらひつまど。（祈りの子細）
おぼせどもるー。あの（瞳）つきるほむこへよ系るべき
よーやてるんまるで伯ぬるとゆゆこのうりん
ものて。（瀧口）きぐちなりけれぞゆづるいとつまぐ
ーくうちたーーーてぴあやうしといふくあげ
（曹子）のりぐざうーのう（方）へいぬるなり（公を取りて行へ）肉をおぼーや
りて。（名弟面）なぐいめんハきぎぬるん。湖口のとのみまう
ーいまてそとおーーたりのふをまぐいてうふけ





謂へ、何もも灸の刻な
れぐまぐいてうふけ
ぬよといふ之○けお
そろーーう」けーきおを
ろーきえ○うて」か
へもぐ之、俗アンマリ之
○引りる」道理な
く之、世ふをなさけな
くなぐいふき之○そ
よ」それよ之○なより」
ると之いふよ同ー、より
ハ元の結く、俗グニャ
ー之○紙ともあーぬ正
作ふるき之○引のび
たる人ーてそ云ーん」を
さるき人ーて氣を
取られぬると之○ち
うきにき帳ニ」源ろ
あーーん九帖をひきよ
せて、女君をへだて

ぬるそそ。（モトノ玉弘）のへりいりてきぐりのへむ。（夕貞）女君ハさるるのーう（モトノマヽニ）
ふーて。右近をのるこふふーふーふーりぶーぬまーう。こふまぐ。（源角）
あをものぐるなーのもれおぢや。あれるところをき
つぬなどやうのもれく。へおびやおさんとそけおを
ろーーう思そをるるん。（赤し）まろあれバさやうのもれよ
はおど（威）されーじ。そそひき（右近）おをーーのふ。いーーう（右近同）そそ
ーーぶりぐーちのいーーうをべれぐーう。ぶーぬーて
伯るなり。おまへ（夕貞の）ーーそこるをるくおぼさるーめと
いへぐ。（源角）そよるどかーいとそ。（夕貞を）のいさぐりたまふよい
息
きもせぐ。ひ（夕貞を）きーーぐーのへどなよとてふよ

滝口をめしてゝ○すぼすてすまれ」源滝口は
のたまへやり近く
へ紙燭をもて来れ
とゝ○おまへちかく
もえまゐらぬつま
しきよ」滝口は平常は
源の御前近くまゐるとは
来ることまゐらぬ恐多
く慎しまるゝ。
なげしの火」長押を
上段の間のかまちゝ
○れよもゝとのひて礼
儀をまゐらも時よよ
り、およるぞとゝ○
あもうのげまえてふ
ときえうせぬ」次の光
まつきて変化の立去
る状に、変化の体の実
よりえたるは滝ざる

もあらぬさまなれだいといとくるびたる人よ
てすのよけとゝれぬるなめりとぜんのうとなき
こちしのふ。鬼物
くべきさまよもあしぬばちのきはきを
よせて。源氏物
まへちかくもえまゐ
のぼらば。源氏物
とてめ。召寄
よ。
ぞ。

十一号一

五小段の第四節に。何おの
一説の夜景及び夕良の

さまは、おもものげよ、と
いふまて知るべし
六小ノ第一節
むかし物語」河海に、
寛平法皇京極院に出
不と河原院に出
けるに、融公の霊た
りをなしたることを
引けり、されどこれも
たゞ昔物語にかやう
のこともありき、とやう
にて知るべし○たゞ
ひえよひえいりて」甚冷
入りたるに、もべて須を
垂れていふ、つよ
めていふきん○さ
こそんづよぶりのゝ
ど」あるよりろあれば」
とのゝへば、然のげん
氣ぶりのゝへどん○

卒去しよふ状を叙せり。光源氏を一大段の五小段とす。
此段は何ぞの説まて。夕良のうせのふぬまを叙せり。
むすめのぐうたるどよこそ。ぬくるとはきけと
いとめづらしのよむく。恐ろしくつけけれど。すびこの人夕良はいい
のよ。ぬるぞと知ぬばんさるぎよ。源氏のうへ
まゐれるはず。そひふしてやくとおどろかす
まへど。たゞひえよおえいりて。息絶
をてよりいそんうれ。このりくいのうと
いひふれのゝべきく。告知もべきくん
かゝるうされこのりきものよ知を屋け
れど。源氏
れどさこそんづよぶりのゝどこのきんちまく。

いといとゞきめ甚忌じき目に哀しきことをいふに○なんでんの南殿ハ紫宸殿に何ぞしのおとゞハ貞信公に、貞信公ハ震殿よて、鬼の出たるを、ハ殿やけの勅定承りて、さだめよ給ふ人とゝ給ハ何物ぞ云ふと云へ共太刀引ぬきて、これぞ多をとゝ給へさせ給へりけれバ、ぞひてうちそるちて、うゝとゝのをゝぐ給へまのり給ふと云ふと世継よあるよし、河海よ細〳〵引のこゝ也夜の注声を高くゆゆるものあよ制しゆゆ給ふ○引のを

いふぞひ給くなりぬるをこのふよやるこゝ給くてつ。ヒシトといぐきて。源氏 吾君に タ負をさしてのるふに。あぐきみいきいでのゝへいといゝぐきめ給ふ給へども。能えいりよたれバけタ鳥のやうにをひものうくぬゆく。右近ハたゞあなむづのしと思ひけるゝ人ちられさめて。なきそどふさあいといゝぐ。なんでんのおとゝれなゝのおとゝをおびやすゝけるためゝをおぼゝいぐぐんつゝくさ弱ミラ見セズ。源氏りとも死ルイいぐつよ放いてのゝどよるのゝ思ハおギャウサンナどゝゝゝ。アヽヤカマシあなのまと。いさめゝまひていとあ急 忙たゞゝ呆レに。源氏よあきれゝるゝちちのふこのをと





と思ひ給ふの子ハ淀口に○いそぎ給ふべきよし云ひて、惟光よもやく給れと云付て、人をつかはせと淀口よのゝふに○引のゝのあざり。惟光ぞ兄の阿闍梨と上よゝえゝ人に、大貳の乳母の家よ比阿闍梨居のふ間どゝゝゝバ呼来りて加持するどせさせんと思ひ給ふに○相どゝゝゝくいふ。驚のよいへとに、尼云よつゝみのふさすに○むゝゝゝさ。恐ろゝさに春海説よむゝゝけきを略して重いへるに、あざやゝのゝるを略してあざゝといこをめして。源氏こゝよいとあやゝゝう物よおそれる人のゝるやまゝげなるを。たゞ今惟光の邸宅のやどれる悩に。ふよまゝりていそぎまゝるべきよいに。とおぼせよ。なゝるゝ此阿闍梨。惟光の家に。そこよりのゝるゝ間どゝゝゝバ。こゝにくべきよゝ思びていに。大貳乳母に。このあま君ゝどのきのんよ。おどゝゝゝ。ゝくいふ。このゝるありきゆるさぬ人なるを。尼云に。どゝのゝのふやうるれども。むねい塞ふこゝのゝて。源氏タ負。このゝをむれゝゝくゝゝるゝてんとのゝいゝゝくゝ。悲しに。おぼさるゝくよそへて。おぼうこのむくゝむくゝさたとへんこゝなゝ。

六小段の才一節に。源氏の驚きまど

つるよ同じ強勢へとあり物るべし、

六ノ才二節

風やあらく〜〜〜く云上の五小段才四節よ風をこ〜打ふきたるまとみそ尾へ○松のひゞき上夜のふけまづまりてものくひゞきるく才ゆるさまへ○からこゑよなきたる上かちびたる声よ唱ハものをごきをいふへ○引るくきいふふさまへふるひ死ぬるあしもえゐるさまへ○引れひとりさのうき人まて原一人動物なくて、ふんべろものひ

ひのふ（ようるの）状なる。和中物語（ときよけんの）風やいあらいいう吹たるを。ほ〜て松のひゞき木ぶのくゆえて。げ（ア）しきあるゐのかく（枯声）こゑよなきたるも。ふくろふ（梟）いこれるやとおぼゆ。うち（原ん）おもひめぐらそよ。こゐこのるこけどなくうとほ〜きよ。人こゑせぞ。などそのくたこのるきやどりえとりつるぞとくやーさもやーんのこれ〜。右近（原）ハものも笑えゑぞ。（原）よつとそひをりてこるくきゐぬべ〜。（原ん）まこれもいのるるん。とんそうとて右近を（原）孤へりと（カシコキ）れひとりさのうき人よて。おぼ〜やるうこそ

十一号三

ゐるぞらも當惑しふさまへ○火ハほのあるよまてくきて上火のちらくと時くゐりあゐるくゐるを云へ○くゐ〜〜〜く」屏風の上の方のうくかしこ火のゐげゐゐりて時きゐをいふへ○ゆのくあ〜ねと云上見ハ物の足音のやうゆめりくくと音などのゆゆゆるさまへ○千夜を見ぐさん」見ハ人を待ゐの久〜きさまをいふへ○ゐのうゐゆゆるよ」見までハ変化の筋ゐれバ見べて物をごきさ海をのこ叙〜つれど、

源氏物語　ゆふぎほ　三十三

ゐきゃ。火ハほのゐまてきて。母屋（ヨ）やのきふよたてる屏風乃こ（上）。おくすこのくゐ〜〜〜く笑匹のふよ。ゆのくゆ〜おとひ〜〜とふこゐ〜し川くう〜ろようよ見くるんちに怪光とくまゐるんと知ぼを。思ひあるきゐるべ〜あ見このさごめぬ物よて。ここの〜こゐ〜ひける日どよ。夜のあくる日どのひさ〜きハ。ち夜（よ）ををぐさんんちし弦ふ。のちうしてゐのこゐゐるこのよゆゆるよ。命（いのち）をかけてなよの契りよかくるめ絵（ツラキメ）ゐるん。こぞんふぞ〜かくる見（ぼをノスギ）ぞちよ。おぼ（モツタイナク）けるくあるゆ〜きんの（巻壷のこうど忍ひ出のこと）

くよりありて名のるゆゑ夜もあけんとするつきそ所ん
も靜まりしさ内さて所ん内の靜まるまつけて又次このことを思ひ出のふさ内いとこまやかのある筆つのひゑよく味もひてゑるべし○ありて」かやうようきゆえありくそのそそいとこゑ、

六小ノオ三節

のらうして性光云ゑ」源の猶ゑ心のひしを性光のらくして
まりたるさま、いとめでたし源の恨みのふさま、左もあべし

むくいよ。かくきしこの前後よりきの倒とゑさきのためしとなり
ぬべきとふあるるめり。志のぶとも世よあるとか
くれなくて。内裡ゑ内よきこしめされんとをたゞめて。
世の人の思ひいそんとよのらぬこらそべのくちぜさび
よゆぬべきるめり。ありくてをこゞ内しきゑを
とるべきこれと。おぼしめぐらし。六小段の末二節ゑ人ゑ驚き
まどふ狀なり。のらうして性光の名を思ひまるまりよる
あのつきといそべばんよきさゞべるめゑ。今
夜志もさふらうそでめしまさへおこうつる紙よ
くしとおも内をめのらめしいれて。のめひ





○ふとものもゑ山源の狀ゑ早速よりのもいそれのふぬさま、左もあるべし○右近さいふのけそひゑ」右近性光の乳母とし」やうを」をゆて、その初め性光ゑ源を夕貌の宿へあるよいせそめしるを思ふるゑ○いきをのべのひてゞ」息を伸ハ性光ゑ乳母しゑ内て行くつろぎのふさゑ○やくたゑ〜ひて」漸く猶豫して〜ゑ○別經なゞ」思ハ変化をそらひ、且ハ夕貌のいきゑんためよ經をよませるふゑ○明日山へゑ」山とのこいふハ、

ゆふぎほ

三十四

出ん。とのあへるきよ。ふとものもいそれのふぬ右
近さいふのけそひきくよふぬめよるをのとうち
おもひ出られて泣くを。源もえゑへのふで。これ
ひとりさのしごりいぬきゆちのゑりけるよこ
の人よいきをのべのひてゞ。源氏きとも思ひさ
れる。暫時とゞのりいとくえもとゞめぬるきを泣
のふやゝたゑふひてこゑよいとあやしきとれあ
るを。あさましいふもあまりてゑんある。源
のるとゑのとゑふ。誦經ゑ經なゞをこそいはそれ
とそ。そのこゞもせきをん。孔雀ゑゞたてさせ

まゝて比叡山のことゝ、
もゝて所園梨ハ叡山
の僧なることもられた
り○おりゐて倒るゝ
夕皇の上まハおゐて
遠倒るゝのことあるし
まやとゝ○おのれも
よくとゝきぬ惟光
も源の注のふをうゝて
教をたゝくゝ注
もたるさまゝ、よくハ
注く考ゝ河海まゝ引
あれど引あよ不及ゝ、

六小ノ卯四節

さいゝどゝ小梯よハ
必しも上ようくゝる事
なくゝもいふ説ゝとあ
り、姉叔ゝハ下のたのし
ありけれゝ係る文法ゝと
あまど二説ともたた

んとて。所園梨あざり物せよといひやりつるゝ。とのゐ
ふゝ。惟光須きゝふ山へまゐりのぼりまけり。甚いとめづ
らのなることもも侍るゝれ。おゐて倒るゝ珍事びは
ゝちれものせさせるふゝや侍つゝん。源須さることもな
ありつゝてなきのふさ法ゐとをゝ一げよらう
シクゝ。ゝゝてまつるゝ惟光人もいとゝれ一くて。おのれも
よくとゝきぬ。六小段の才三節ゝ。惟光まゐる
さいゝど年をとりて。年をとりてゐるゝ。鬱きまどふ。さ法ゐるり。
志願じゝ列て功者なるゝ人ゝぬる人こそ。ものくをりふ一ハとのもし
ありけれいづ源方を惟光もも一くもこのきどちまて。いと。





らど、ゝ故ゐハ文を書ける
まて、惟光源の注のふ
をらうたゝくとゝまりう
てさて思ふまつるまハ
若きどもゝそめでたけ
れさいゝどかやうのを
りまハ年うちぬびた
るゝ人ゝとりふさまゝ
ゝぬ所ゝぞれハ文ゝを
遠つり○山寺ゝそ」山
寺ハ死人をあつまふす
多けれハめだつまどと
ゝ○思ひまゝ一て」
惟光のまゝ一ゝ思案
もるさまゝ○むの
しゝのゝ一女房」惟
光須ゝ書源もゝ知のゝ人
一女房の尼まるりて
住める山寺とゝ○引
いれ物至のめのとゝ云

んまゝもなけれど。この法りまどまきのせむ
とふ。とびんなるゝ。この人ひとりこそ。
むつまゝうもあしめ。おのづゝ物いひもら一
つべき。眷属ゝ従類をいふゝくもちまゝ。思たんまゝ。ゝ法
をいでおゝ一ゝまゝ一ねといふ。源須さて思より人ぞく
まなるおゝ。いのでのあゝんとのゝふ。惟光須げよさぞ
侍らん。おのふるさとゝゝ故郷女房などのゐるゝひ
ゝ夕皇の宮ゝ
よゝうゝんぞ。なきまゝ。◎◎◎ひ侍らんよ。とゝりまげく
とゝのむるさとゝ人里おのづゝく侍らんよ。おのづゝ
きこゝ遍侍らんを。山寺ゝそ行のやうのゝとおの

五 惟光が父の乳母なる尼一女の年老て尼よりて住たるに○いつがくみて引あへ河海よ、法師のおを引て斜ふれば系黒髪も志ゝ川のこうばくもまぞあいよけるこの五とあり、こうばくさまくゝの説あれと、師説も、身つぞむこづぞむい縮むことあるぞいとよろゝ○ゐごこの囲こ四方とゝかこめるさまをいふ○うハむゝろ五惟光夕貌を抱くハ恐あるなよ、逆よつくこて抱きて車よのせるこ○志だくのすゝ也俗づのゝゆきまゞ見ものまぎるること侍らめと思ひまハして。むこうこるまへゝ女房のあまて侍る。えんゞの山のへんようゝしてまつらん。惟光がちゝの尼ハ。ゝ川でくこてきこ侍るなり。あるゝハ人のくゝ川でくこてきこ侍るなり。あるゝハ人志げきやうよ侍れどいとこごろよ侍るときこえてあけこるるこ祖母まぎれよ侍車よ入。夕貌人をえいぐきまるふまゞけまバうはむ志ろまおゝくゝみて。惟光のせまる。いとさくやこうこてう疎とま志げもなくゝらうゝげなり。志ゝかゝゝも



シツカリトモといふ夕貌の髪の毛ハ逆よりあへ出たるこ○めくれまどひて源を惑目もくれ惑ひのふこ○あさまゞうこ心外よこ○ありえてこさまを葬り竟る状をこ○人さるこのゝ夜あけて人の騒ぎぬうちよ、夕貌をぶ山もへ送らんと惟光おいふこ○右近をを夕貌よ添て車よ系もるこ○引れハのちよりくゝ見ひきあげこ惟光ハ歩行してさゝぬきの裾のくゝを引上えせるバ。のみハこぼれいでたるも。めくれまどひて。あさまゝうこのゝとおほせバ。惟光河ゝまえ馬をこ二条の院へ海をこんとおぼせどゝや侍馬まて二条の院へおそゝまさるこん。人さわぎくこるり侍らぬほどまとて。右近をそへてのこれバ。惟光の馬をこ。惟光よ。ゝまこるこ。惟光ハのちよりくゝりひきあげるどゝて出こりこ。半分ハここのついとあやこくおぼえぬおくりなれど。源の。惟光の気色のいらゝどき沈こまれで。夕貌をそてゆく。源ゝてゆよ。君えものゝ見返のゝびこれこのさ海まそおゝ。二条院へこゝつきこり』六小段の第四節こ。夕貌の屍を山寺へ送り。源ハ

て出たつ。○おぼえぬおくる。思ひのけなき野辺の送りとて。○ほけ〳〵しきのいとゞきを云。惟光ハ源の内けゝしきのいまゝしきほうげきをゝそれて、ほうきのどくなる思ひて、身を惜まぬよるゝ〳〵ぬ世辺の送りつかうまつるとて。○引れるのさきゝ。あの人のものゝえゝるゝ。四位なきさまなり。

第二大段第一節

小侍従

ゝ張。床上ゝ施し張る帳。○ものどそ云。同車まて行べきうつるものをすゞそゆのぎ思つらんと思ひのふ二条院へ帰りまふ。偖て。是とを第一大段の六小段とす。廿段を何すゝ。洛の山妻より。夕貌の上ハ死屍を東山の寺へ送るまでハ始末を叙せる。○さて廿第一大段を。源の初て夕貌をゝのひゝより。夕貌の上あやしきことゝようてうせのひめれバ。その屍を山寺ゝ送までの事を叙せる。物ゝ源ハ右のりも右ぬをゝ。ひてゝとひ孫をゞ。まゝいとあやしきことゝなるゝ。覆面をさんして。通ひのふ。いとゝのゝ。ものゝふのこゝ。ものゝくおとゝめのゝ。何のゝ初てとりのゝ。このゝひのふのこゝ。ものゝくおやけ孫ふさまハ。淡む人をゝて。あやしと思ゝ〳〵むる事つのひゝ。ものゝのゝ。ものゝ。ものゝ。もの

ふとてといふとそのおちたるをんとあり、弘恭云おちたるまあらびとも、とそといふ句をそへて解もべし○おちるぶら云〻評釈よ織るふれのつるかよ人を座せしめびえ世るぶら簾ぶーよのくるをえこのをよけぶらひありとのこすひてぶるるくくもこをたちるぶーまのつれバとあるまて知られたり、付説よろし○めれとまて云〻源中将よハ世家のことをいそぶ乳母の家のをんお病死きくるまよりて織

のひありきのふもえらぶ出をーざるとしーう。
帝おぼつのるぶーらせのふ。左大臣殿おの〻夜ぶち糸をとる
へど。源中将とうのちうじやうだうりをこちなぶらこちな
ふよいーるをへとものるひて。簾そのうちすぶら
のるふめれとうて侍るものくこのみ服さきのころは
ひより。おのくうづひ侍るーお。かーら頭剃そり
いむ戒受とうけるどーてそのきるーまやよこの蘇生
ーりるをーを。このころみおこりてよるくをん
るをよたる。今ひとたびとふーひこをとやーあ
りしのバ。ひとをきなきようなれ則レナジミさひーものくい



すへれバ第四を指和へーさをまよいひこーらくのふえ○つら
ーつれをーえ○えいであへで」家内を出さぶーてえ一ものよ
いきあへで、とあるよーまて評釈ハいきよ作る○おちをぶり
て」源氏のるのをよりてをぶりてえ○神事云〻」夕良のう
せ侍るハ八月十六日のをえ九月八赤月まて、一日よりハ神
るえ卅ケ日の織まふれのふまりくく糸内あるふまぶきる
えと死多まあり○おちをぶきやら」俗よ

まいのきざこうよ。つーーとやらもをんと思のくてま
ありーよその乳母の家をりける下人のやをひーける
お。侍よえいであへでなくなるをよけるをおぢを
ぶりて。日をくくーてをん。死屍をとりいで侍けるを
きくつけ侍るとーのば。神事をするにハいとふひ不都合
んるることと思ふのくうーこをりくえまあら
ぬをより。付晴よりおはぶきやこをやを侍らんあ
頭しらいといくーてくーく侍れバいとも痛無礼へ申ハよ
弟して乳母とえてをゆることるどのくまふ申ハさぶさるまー
をこそ奏ー侍らめ。夜ぐる侍あそびよ。恐多をを

いふ風邪人○ぞちすく〻り」中将立ゆんとして又立ゆりきてく〻○いきぶれ」行觸く行先まで穢まふれたるく○たぐねばえぬけぞ〻ひ」おもひぞけるき穢く○いとこそたいぐ〻〻」甚痛心よ伝ふとのまく、本居翁ぞたみの説又怠々の字音の説などあるハ何も非く師説たいぐ〻ハイタイの仁を略きたるといふ」廿説よろ〻○義人の辨」中将ハ疑ひのふゆゑよ共よ来りなる義人の弁よ真実ら〻〻勅答〻のふく

くもとめきく〻せのひて。(清の)(音)(色)あ〻く伝りき。と知こえのひて。ちすく〻り。(北の中将)いこのるすいきぶれよかく〻らせのふぞや。(源の)のべやく〻せのふこと〻そ。まことふおもひのく〻らるといふよ。(源)むぬうちつぶれめひて。(自)おばえぬけぞ〻ひよふれたるよ〻をそうしの〻いとそ多いぐ〻〻く伝れと。つ是まくのく〻どんのうちまはい。ふのひるくまれ〻きことをおばをよ。(人ニモアヒ玉ハヌ)ちなやまけれど。人くめもらあそせのふび。義人の辨(べん)をめ〻よせて。まめやあ



○かく〻るよ〻をそ〻」かく〻るるありて云く〻」いづれるはもきぶれのとく〻、

小ノ中三草

かく〻るけぞ〻ひろく〻人〻げのふぐ」先ハ怪光と密のことを謀りるいんとして、ゆきふれることせて、人を遠ざけるふさまく〻○分ハとみまそつや」めそや蘇生あ〻〻ぐとそてたまのとく〻○なるあ〻とく〻」赤山の尼ぞ住ゐよ夕貞の屋を長くおのんも不都合なれバとく〻○とろくのこと〻ともかく〻ものとく〻、

よかく〻るよ〻をそうせさせ孫ふ大殿(左大臣)(妻の上のこうえ)るなりて元年ぬ情せうそこるどゆ正のふ二(一小段の中二草之。源痛哭の二。内裡より勅使ありて。源の安否をとりせるふ。大殿の公多ち訪ひるふ状なり。)十七日(人)日くれて怪光系れりかくるけぞ〻ひ所りとの多ひて。ぞるる人〻もこれ〻ちなぞ〻ぞるまるぞれば。人〻げ〻ぞめ〻よせて。(怪光を)(源自)いのるぞいるとそとそそて伝やとのるふまく〻よ。神(源)を伝のなよおく〻あてくなきのふこれこれ川もなく〻。(自)いまハあぎりよこそい物〻ふめれ。なぞ〻くとこるり伝らんもぞんるき沖。(明十八日)あ人るん日よろ〻く伝(吉日)

あのことといふよあるじ。葬礼のことをいふを、いとそ、とあるこのことと云へ。○げさいたよる也。右をこのるーひのあまりよ、谷よも多を投げんとまる我へ。○このふるさとと人よ。右也ハこの都へ下ひけるーを告やらんとやへ。○志ぞーーゐひ志づめよ。性光ぞ右をを諫めていふへ。○このさまゐひめぐらしてよく前後をゐ集してへ告やらバ、夕貞の都の女房などの聟きき疑ぎんとを遠ざまるさまへ。○いかるべきまゐ源

性光の初る

属

性光初

古をえ

夕貞を

れバ。とうくれとこいとしうとき老僧のあひ。

りて侍るよ。いひこひつけ侍ぬるとゆゆそひ

うつる女をいのとのへぶ。性光初それちんえいく

まどう侍るめる。ゐを。ゐ。おくれーどとまどひ侍り

て。けさいたまくもおちいりぬべくるんこさまへ

侍る。このふるさとぐよつげやらんとやせどまぞ

ーゐひ志げめよ。このさ侍おひめくらしてと

ちんこーらへ聟おき侍りつるとのうゆゆるまく

よ。いとい源んいこどとおぼしてそれ侍れもいとんちるやま

ーいるるべきまのとちんおゆゆるとのこ

性光の初る

聟

源

十一号十

性命もあやうきこと。○なるまこのさらよ。性光源まむのひて今さらよ何のきほどよゐーめーまふん先も前世の因縁なるべーといふこと。○さこをおすひるせどさやうよ皆因縁とおすひるせどこと。○いとづーよなーつるうどと空ーくなーた恨ことこと。○少将の命婦細流よ性光ぞ妹とを。○さーーゐ法師ーーー少将の命婦ちゐ句編き他葬ふの法師ーるどよも五のまくまハいそで見ざまよいひて侍りとこ

性光源

源

源氏物語　ゆふぎほ　四十

ふ。性光源なるのさこよおすほーのあせさせるふさる

べきまこそよろびのと侍らめ。性光ケよるまこさーー

とゐるのふれバ。ゐ者ぞこれうつおりうちて。よろびハ

ものー侍るどゐ。源氏サウカ。さこなおのひるせど。

浮うのびたるんの志ぞ。ナグサミ。夕貞をいとづーよなーつる

うどおひぬべきぞ。いとめちきセツナキすり。少将の命婦な

どまもきのまこるる。あまる見。大蔵の尼ーてうやうのとちなど

いこあらるくを。ぞーーーーるんおぼゆべきと。ロち

ぶこめまふ。性光源禁らぬほうーーぶちるどまもこれい

ひるをさ侍とと侍をと少ゆるまぞかりめまく

○かくりのまくる。惟光の
源よりたれて源安ん
しのふんかくりふされ
ようこのるまこ○
みこのくさくめきるる
げきのふ。源惟光と
ひそく話をしそ給き
のふをあやしむこ○
そのほどのさまう。
華の節の作法こ○み
ものとくく老山華の
ことを源のおぼつかな
おらせるふまうて、
惟光ドウイタシテさ
やうよギヤウサンニ致
をべきとこ○馬まそ
すのせん。源馬まのり
て行んとこ○そぐ
しき。たんぐハイタイ
こ痛んのまこ俗ニ困

る。ほのきく女房などあやしくなるまんけお
らひのまーのひそ。ほまを給ふぐみあ
くさくめきあるげきさまふとほのぐあやしぶる
無事ふこ
源翁
さらまとるくあるせ。とそのほどのさまうれ
めんど。惟光翁なまそのとぐくあくきぐきまれ侍ふぐとそ
惟光立テ行こ
たうおいとのれしくおぼさまれぶ。びん源翁 呂都合 とと
ろふべけれどいま一ふびのあきめしをみざ
らんおいとい。キニカハル夕皇の屍
のふを。惟光ん いとふぐしきこくハろくど。詞 さおぼ
されむそいうぐせん。まやおそくまそ。物ふ



つたのといふこ
○このごろのゆやつ
れよこ。頃日ヨリ身の病
る通ひのふとそやれ
たるさまよ調ドた
る狩衣こ○かくあ
やしきこちよ。かや
うまれまふぬ道
まこ○あやふうり
物ぐりよ。物ぐりと
ハお夜の変化のたろ
しのりしをさたこ○
たぐいまのこくれこ
ぐふ。玉小櫛よたぐ
いまのとハ今敢華
らんとまこるれ分
のうちまこぐふとい
ふきこ。こ。ぬちとほく
ろし○ぬちとほく
おぼゆ。上のあやし

けぬきいいよおぐいせおそくませとやせぐこの
ごろはやつれままうけまこる。おりはさ
うぞくきうくちるぐそ出のふ。源こちこのきく カキクレン
らしいみぐくるくおぐこけきぐ。めくあやしき
こちよ出たちこる。あやふこりしし物ぐり
よいこまのせんとおぼしまづくど。ヤバリまるる
しきのやるまうこなくたぐいまれ散あらをこぐ
ハ。まこいいの世よまあまくしまこちをこもこ
んとおぼしねんじて。惟光ん 側のこいふ源氏をぐ
して出のふ。みちとほくおぼゆ。一小段の中三節こ源痛

き過ぎしとある點所を、あやしき迄なれば遠く送えのふさまを、

一ホノ者四節

名べ堂のうへ」名部野ハ葬送の地なれば平生のんなるべものの如そろ〳〵えのみべきなれども只今の所心まふ何とも思ひのハぬとえ○あくうさへ」高山の尼の所ハ今の吳山の辺にあてたるなり、四面ルのさびしきれバ堂きとの者たてぬ念仏廿分の所なり取計らひぬふゆるよ、念仏ヤル

哭の三。性光院より夕皇の上葬りのこと を源へ何ふさま。并こ源山寺より行ひ法系を叙せり。

十七日の月さしあがりて。明川ノ おぼろのほど。陰さきの名べ堂のうへ。名部野のうへ。たなどうや火ル風のうなるよ。名べ堂のうへ。たなどうやりたるなどなど。ものむづかしきル。ちるとル笑迫孫ハ。おきみぐるんちしるひておふ〳〵まし。つきぬ。あ〳〵。彼尼の住家のうへ。ふ〳〵さへ。ものこそ。ものこそ。いと。あの。のうげ月のうへ。ひいと。表なり。うあの。仏炮のうげ月のうへ。きそえ。死人を置ん風。その風。ふ。古近ノ女ひとりなくこゑのこと。外しく。とものうへ。法しぐちの二三人物語〳〵

十一号十二

つ。ちぐさとの者ノ者たてぬ念仏ぞ。寺のそ初やル夜ちなおとちるひたてく。いと志めやうなり。清おのいうぞひおりいおくいん迄て人のけそひル志げいりけ。これあまぎのこゑる大とこのこゑ。尊クこうとくて。煙きうちよみこゑる源のこりるくおぼさる。一小段の者四節ノ。源痛哭の弱の袖しきさ。源屋のうちまを叙せり。いりのへれむ。火とりそむけて。右迄ハ屏風へぐそてくふ〳〵。いるとびあらんとえのふ。ニトノ夕鳥の上のうえノおそろしきけるおぼ迄ば。いとらうしげる。カハユラシ

源氏物語　ゆふぎり　四十二

ゐるー」夕皃の死相の存生の時と変らぬとぞ。○うちまもりてくまどいーのふ」ゐを女房おき捨のこゝーおきて感ハ[illegible]とゝ。○ふまとふちゝぬ」大徳だちハ源をゐ夕皃をゐ侍へとふちゝ〜ゐど女房ままをゝて哀れと思てれて泣さまゝ。○いざ二条院へとのゐへど」右近を二条院へ乗れと源のくのふゝ。○年ごろをさるゝ」右近ハ夕皃のをさるきけ[illegible]ゝ片時ゐ離れぬ馴き仕まりしを係ゐ別れて侍ふゐゆらんとゝち歎くゝ

夕皃の乗

泪

南縁

カナシキ

大

右近

年

泪

夕皃

ゐたるゐちゝ。てをとゝゝて。ゐよいま一ゝびゝ思をぐゐよきゝのせゝまへ。いゐなる者のちぎりまゐのゝ。おきて感ハ[illegible]とゝ。ふまとふちゝぬ」大徳だちハ源をゐ夕皃をゐ侍へとふちゝ〜ゐど女房ままをゝて哀れと思てれて泣さまゝ。○いざ二条院へとのゐへど」右近を二条院へ乗れと源のくのふゝ。○年ごろをさるゝ」右近ハ夕皃のをさるきけ[illegible]ゝ片時ゐ離れぬ馴き仕まりしを係ゐ別れて侍ふゐゆらんとゝち歎くゝ





○このちゝきことをぶさるゐ物ゝて」かるゝきるハ今さゝゐよいゐそもの〜ゝゐバそれハそれとしてゝ。○人ゐいひさゐのれ侍らん」右近のちゐざと人ゐいゝられんとゝ。○煙ゐゝぐひて」火葬の煙と共ゐ右近ゐ夕皃をちゝひてけんとゝ。○さゐゐん世の中ハあゐ」世の中といふものハさやうなるものきことゐつゐまあるものゝとゐ近をさとしゐふゝ。○とあるゐ死ゐ又かくのめくなる者化ゐといふゝ。○

れてまゐりて。いづこゝのかゝり侍らん。いゐなりのひまきとゐ人ゐゐ侍らんゐれ。きことをぶさるゐまて。人ゐいひさゐぶれ侍らんゐいゝぐきことゝいひて。なきまどひて煙ゝぐひてちゝひまゐりゐんといふ。ことゐうなれど。さゐゐん世の中いゐる。さゐれといふものゐのれ。ゐゝぬハゐ。とゐゐゐかゝゐ。ゐゐゐど命のゐぎりゐるものゐなんゐる。ゐのひゐるぐさめて。ゐを教えて侍らんとゝられをたのめとのゐまひゝ。ゐゐゐゝて。ゐ。いきとゐるまゐ

ふまとふちゝぬ」大徳だちハ源をゐ夕皃をゐ侍へとふちゝ〜ゐど女房ままをゝて哀れと思てれて泣さまゝ。○いざ二条院へとのゐへど」右近を二条院へ乗れと源のくのふゝ。○年ごろをさるゝ」右近ハ夕皃のをさるきけ[illegible]ゝ片時ゐ離れぬ馴き仕まりしを係ゐ別れて侍ふゐゆらんとゝち歎くゝ

喩

かくいふ事なこそ言」かやうよいふ事なこそ教えぶくけれといひて右近をなぐさめのふさまを、

「ホノ第六節」

狩ハ明ぶくさ言」上の第三節より狩ふけぬさきくさやうへらせおそくませとあるそ尾へ○いとじき物者」ムまどひのをうるよ途方を失ひるふ狩へ○あまくまずく」夕良の死歌の存生のとき寐たるやうよ打ふくたるさまして、涙と取交して著たる紅の御衣のをすくうちかけて立さまを衣を

じきこくちをれどのふも。北たのすげる

や＝一小段の第五節へ。源痛哭の五。源左山のみ寺。

の板屋よ入てタ良の嶺をえのふ狩を叙せり。

性光狩ハ明ぶくさ言ふよたりいたるぬらん。源ちやあ

へらいいまひるん。とゆれば。源へりうのうせ

られてむぬもつとふるぶりていぞのふうち

いとあけきよ。いとぐしきあさ勇よいづ

こともなくまとふうちしのふ。源ん。ありしるぶ

らうちふしたるさま。ホうちまるくしうへ

まくおとぶくれる。源の紅衣のはぞのきられたりつ

るるど。いのなりけんちぎりうまのと。うちをぶ

十一号十四

打ハ明ぶくさ言」上の第三節より狩ふけぬさきくさやうへらせおそくませとあるそ尾へ○いとじき物者」ムまどひのをうるよ途方を失ひるふ狩へ○あまくまずく」夕良の死歌の存生のとき寐たるやうよ打ふくたるさまして、涙と取交して著たる紅の御衣のをすくうちかけて立さまを衣を

打ハ明ぶくさ言」上の第三節より狩ふけぬさきくさやうへらせおそくませとあるそ尾へ○いとじき物者」ムまどひのをうるよ途方を失ひるふ狩へ○あまくまずく」夕良の死歌の存生のとき寐たるやうよ打ふくたるさまして、涙と取交して著たる紅の御衣のをすくうちかけて立さまを衣を

男女ふあびようちかけまづくきるへ、とふ構よあう○つくみめ

ほどうて」拾遺よ兼補を堤の中納言と

いひ、大和物語よ監命

婦のつくみちる家を

ううてとあり和名

へ、とあり○かくるを

ちのをまて」その途

中へ○ふれぬべき」

をふれハ溢と同下言

まて塙和ををるれて

たくよふさへ○引和

をのぐくくい性光後

悔のさまへ和名おた

しのまて去のとして

立ーをくふ氏物語を

諫めてとぐむべき

源氏物語　ゆふぎは



らおぼさる。馬ミカトまをおぐくくのうのふ

まづきふさ海ちれを。性光ふれこれそしたをけ

て。おたくまさをるよ。堤はくみのはどまて。

るまうまをべりおりていくくはこくちを

どひけれぞこくうちの紅をまてをふれ

ぬづきまやあくん。さくまえいきつくまづ

きこくちをんをる。とのあまふよ。これこれの

いちまどひてまをおぐくくいさのふ

とも。かくるをまおていぞをまづきあふ。とお率

りふよいとんあを急たぐくければ。源のふよ

ものをとゝふさまこそ
○さのゝまふとゝさ
きゝ法ぐ今ひとたび
夕負の扇をゝゆめ
んとのゝまふとゝも
こ○川のゝよてをを
あらひて」性光法の
さををえて途方ま
くれて、取敢へずを
洗ひて、清水の観音
を念じまるさをゝ
これ今よひ十七日の
夜まて観音の縁日
なれなこ○きゝも
ちひて云」法も一ん
ま観音を念じのふ
こ○みとゝたまけ
られめひて」性光よ
とやおくたをみられ
てゆりめゝるさをこ

てをいあらひて。清水の観音をぬんじまゐり
て。ゆをそべゝ。おもひまどふ。きゝも法ひて法
こゝろをおこして。のうちよ佛をぬんじを
ひて。みとみくゝゐをけられのひてをん。二条院
へゝゝ。孫ひゐる』一小段の第六節こ。法夜あけぬうちこゝとてゆりを
ふゝゝて。馬より法ぐり落ちのふ状こ。是までを第
二大段の一小段とす。此段八皆法の所哭きのさま
こ。さて〳〵第四節まる。赤山へゆのまふゝる。だゞ法あのこゝ
のこそ光多くみえて。人のけをひゆ法げうけ」とあ
るい。そよひい観音の縁日なれこ。縁日なるとあ
い。十七日の月ゆて云まて。ほゝをこて。さて此六
節まて。性光お川あゝてゆをあらひて法あの観音を
念じまりてゆ」とある所法せり。まゝ性光お係よ観音
を念じまりたゆを。をりゝ。十七日の夜のと
なれをなるさをこ。かゝやゝのいゝこのゝゝゆ。あこかりよ。



二ホノ第一節

人〳〵ハ二条の院の女
房だちこゝぐるし
きふ俗えとゝも
なきをゝまれるふな
きとゝふこゝて、俗
おちつゝぬふとゝふ
ほどのこゝ○まこゝ
ふゝるひぬるまゝに」
昨日までい悩まげ
なるも物ゆひふけ
のゝひよふれゆへ
るをまぎらきんとの
法ゆゝらひなるゝ。
ゆふはまこゝよゆゝら
ひゆふとゝ○まゝり
ゝら〳〵小構よ法こ
ろ病の祈りなゝよ

人〳〵ハ二条の院の女房だちこゝぐるしきふ俗えとゝもなきをゝまれるふなきとゝふこゝて、俗おちつゝぬふとゝふほどのこゝ○まこゝふゝるひぬるまゝに」昨日までい悩まげなるも物ゆひふけのゝひよふれゆへるをまぎらきんとの法ゆゝらひなるゝ。ゆふはまこゝよゆゝらひゆふとゝ○まゝりゝら〳〵小構よ法ころ病の祈りなゝよ

よゝ遠ゆなゝ文を廻したる巻づゝひゆけてゆおよゆ
ぬ行文こゆこんんかゝやゝのおゝゆをゝを法ゆ。
あやしう夜ふのきゆ法ありきゝ法人〳〵こゝぐるしき
ゆゝぎゝのれこれぐゝ倒よりゆ法ゆ法ゆ法ゆ法ゆ
びありきのうち法類きゝなゝゆゆ。昨日のみけ
しきのいとなゆやまうおぼたまゝまい。
ゝでゝくたどゝまありきのふゝんとゝゆげき
あゝり。まとよふゝのひぬるまゝに。いとゝゝ
くゝゝゝぐりのひて二三日よゝゆまぬるよ
むげよよゝゆやゝゝのふ。肉ゆゆきゝゝ
めゝなげくゝゝのぎゝゝゆ。法いのゝゝこと

祭り被へといふこと多くみえたるハ陰陽家の行ふことなとあり○世よりすぐれ云〻」今もあるよりよもぐれたるハ短命なるといふ俗言のさまそ天下の人をしみさるぐさまへ○くるしきみんち」源苦しきこんちの中ゝ夕貝のかゝみとおもして右近をいふらりのゆえ○怪光こゝちも」怪光の所病ゝんも殘ぎまどゝ右近のゝを思ひやりて、ありつゝのまゝ○気いさゝこの云〻」源をみまゝ〻も所病の源ありて

ぞゝよひまるくゝしる。まつりそらへ俗法ぞほうなどゝひつくをべくもあゝぶ。世よたぐひ類なくゆくしき所源のあり様なれバ。世よなるぐくおふしまをまぐきまやとあめ乃ちゝの人乃さをぎるりくるしきほんちよもゝの右近をめよせて局なるどちの所屋近々くゝのゝりてさふゝえせのふ。これゝ怪光ゝりこゝちもさゝぎまぐゝどゝ思ひのどめてこゝれ人のゝづきなゝと思ひたるを。右近々人のゝづきなゝと思ひたるを。シヅメテタヨリツキもてなゝゝあをけつくさふゝえん。天いいさまの源ありておぼさるくゝとゝきふめゝあてた



思出ゝのふゝきふ右近を召して使ひふゝえ○ほどるくまぐらひつきたり」右近まゝるくゝ二条御の人ゝゝよ交らひ会ひたるゝ○ぶくいとくろうゝて」服衣の色深きゝ右近夕貝は高よ凶服を着て、ゝえちきこうゝよかたちもよゝくゝみど、ゝえぐるゝのゝぬ考ゝえといふゝ○ゝゝごろのたのみ」評釈ゝ云、右近夕貝の上を年ごろたのゝて仕へゝを、ゝを恨ゝとゝぐき人を失ひて、さぞゝ細ゝ思ふらん、ゝるぐさめ

あひなゝのへぐほどるくまぐらひつきたり。右近の状ゝぶくいとくろうゝてゝ夕貝の容ゝちなどよのらぬど。源○詞○かゝゝえよゝぐるゝのゝぬゝのうどなりあや○○しうみゝかゝりける所夕貝の契りよひあきれて。源も世よえあるまぐきるめりとゝ比のたのゝうゝなひてゝぐほそくおふゝんなぐさあるゝ。まゝなぐくゝバよろぐまゝぐくまんとこそ思ひしゝの。ほどるなくゝ夕貝ゝ立居て死ぬべきゝとちそひぬべきぐ。口をゝくゝもあるべきのれゝと思びやゝのよのまひてゝよゝばゝげよなるきのゝへバいふ右近々ふひるきゝとを

よ、命も〜ちるぐ〜くバ、万事よつけて、汝を養育せんと思ひ〜をほどもなく亦も死ぬべく思ふこの日を〜といふさえ、

二小ノ才二節

あ〜をそ〜と足も地よつうぐといふまて、むげ〜く奔走もるさまえ○あめのあ〜ようも云し志げきことを雨の脚といへど、それよりさうていと志げきえ○さまざまのことを祈禱修法などえ○とるなごり異例の餘波えおこたりざま枝気の方まえ○けぶらひ

甚ザンネント

バおきて。いくぐうをそ〜とおもひ由二小段の才一節えぞ。源痛哭の七。源の悩をえて人〜ものすごふよ。帝ようも内裏うちより源つのひあめれのようもけよ志げ。

帝のおぼ〜るげきおそ〜まを源きく〜のふよいとあ〜ぐもけるく〜てせめてつよく心強く〜笑〜る。左大臣大殿もいと〜けいめいの営〜セワラスルえ。日ごよりのひつく。

さ面ぐのことをせさせのふ志る〜ようやれよ日いとアラシおもく〜ふづ〜ひ〜まへれど。とるなごりのこらぐおそ〜ふうざ面よえのふ。けぶ〜ひいく絃

二条院へ

十二号二

いく〜のひ〜も云し死穢をいとのひ〜も枝気〜のふ日も、一つよ満月竟たる数ろれぐとふきえと評釈よあるおめ〜、抄よ夕良の死のふ八八月十六日ろれぐといえ九月十六七日ろるべ〜とあり○むづるし〜つく〜ませるづらハ〜きまで惜〜ませのふえ○引れよもあ〜ぐ云し源志おんでもろ〜生うくりけるやうよ思ひさふとえ○形くいく〜うう云しろるのう〜ぐ色めきてえ○ろるおめぐ志夕良のと思ひ出して物思ハ〜ぬひ〜ぬ。ひとり川まくちぬるよろれバ。帝のおぼつうながらせのふ源ヨギナクりのひちぐ〜ふ源んよりろるて。内のうちとのおふよ条左大臣大とのよぐ源を車まて。むのへまりめひて。源物いくろるやうやとむづのうつて〜ませまりめふ。源れよもあ〜ぐあ〜ぬよよのへりたるやうよ志ぐ〜ハ笑正月ろまふ」九月廿日乃程よぐおそ〜りたてのひて〜いとい〜うおもや面痩全映えを絃へれど。や〜い〜ぐうなあめ〜うて。なぐめぐちまわるねをのくちきめふ人をりとぐむるへもありて。源めつけなめりなどいふも

ふる○「ものけ」を八源の独してねをなきのふさまるどをえて、此物のけるゝんと人く疑ふゝ、

二小ノ才三節

のどやうなる」心ちづあるゝ○その人と比何人とゝ○あまのこ」前の一大段五小段才二節よりあまのこるれバとて」とあるよ照応○さぞなり」然ぞなりゝあれほどまでよといふとゝ○なるそあ」どうしてあゝ○なるゝなるぬ此なるのり」なんでもなるきいやゝき名をゝと主人を卑下し

あり」二小段の才二節ゝ源痛哭の八九月廿日のほどよ此悩おこりたてのよ扨ゝ廿日よりのく肉の人あゝをそらまて見ひまどゝふ内裡よりもゆつあひ面のゆゝよりもげよきげゝ」とあるぞ序悩の極度よて。やうゝよ本復きのるふゝされバ上文よ眼目とした るまどゝふ二条院ゝそゝ といふ誤か。是より以下よ於てハ皆省き去まり。

右近をめゝ出ゝ。どやうなる夕きゝ物語なるどし のひて。怪ゝ源氏いとゝん。あゝ。ゝ。ゝきなどてその人ときゝせ ドとはあくゝいのくゝり。ゝぞ。禍まよあまのこなりけ。 さぞなりよ見ふを去ゝぞ。隔へぞ。ゝばゝん つゝゝゝり。どのるゝバるとてあふゝかくゝき 右近ゝ 此ゝふとゝハ侍ゝんゝつの移ゝてあハなるよる らぬ此なるのりを卑主ゝのゝ夕負のゝゝ卑下ゝ。ゝ。ゝ。

重きかよ不狭きこと○あるこのちよ」強てこ○かくるべきちぎり」かくあべき宿縁とこ○みうちうへ〜こと」表よおぼゆるゆよみ、おのへ〜思ひやられて、つれなく覚ゆるとこ○かくうるおぐ〜るまづきまづきを」かやうまタ自の世よ長くあるまづきくをサウシテマアく○七日くの仏を十三仏を七〜日のるよあて〜書て亡者の為よ供養をるるすこ○心のうちまを」タ自ろとハくよかく〜すくバくのうちまもといこ○なきぬうろ〜ろまを」亡

メイワクナ

うるさき身のみ煩ばかるん。ある所。フトシタコトノをこのるこのり
ータべより。あやしくこころよかりて。あるお
ちよみをうしも。かくるべきちぎりよこそい物
しのひけめと思ふも哀まるん。みうちのくしつ
らうおぼゆる。かうるおぐるまづきまているど
さしもんよ主人の多の上を語こと。哀とおぼ遠のひりん。行く
いしうるれいまふちるよどをかくをべきぞ。
七日〜の佛かく〜せても。あおためとのんのうち
まも思ふんとのるへバ。右近詞るまのいへぐて少遠させ侍ら
んうづうう主のびをぐ〜のひ〜と所。タ自のなきぬう





ちうのひ〜添よこ、

二小ノ末四節

おやたちハ」タ自の父母をいふこ」をより右近おタ自の上の多れ上を物語るこ○新身のほどのいもとるさ」中将タ自をよ紀縁もおれとおほせと身の多限のあさきかよ物まをおぼつるるく思ひのふうちよ命さへちるるくるりしこと○三年だうり」新釈よ云所中将三年ありひるよ二年めよ玉のうちの夫生れ三年めようきこるあて外へあくれ四年めよ侍のあよひるより氏次の年玉の

ロヤカマシクアラハサウカイトサシオテ居タフトこ

しろよくちさぶるくやハと思ひのるるだうり
よるるん。二小段の末三節こ原痛哭の餘波の一。右近を召て物語しのよ。侍悩後まて徒然乃状なる。
右近詞

おやたちハたちやうせのひまを。三位中将タ自の父こ
んゆ遠し。三位中将タをこうたきものよ思ひゆこのへりし
ゐど。系多の思どのいもとるさ所おぼをめり
しよ命。いのち さへ多へ多へ。コラヘタモチ 多面をこ物まし。のち。フトシタコ
のくたうして。トノ所。ところの中将まぐ物よものしるひ
し時。タ自をこ。そめをうちせのひて。三年だうりハんざ
あるさるよるよるひのをこそのの秋乃比。の右
大玉殿よりいとおそろしきこと此ゆ遠まで

づゝの四ッなるを筑紫へ。あそゆく○いとおそろしきことの」右大臣殿の四天ハ殿中務の妻へ公徴殿よりは女を御どゝのへ。るるハ帚木ニ又えさり○ゆみるゝ「住ミあぐんで○ゆゝしゝよりハふゝでのりたる」俗ニ三年寒りなどゝよ方なるべゝ○とおぼしなげくめるゝ」此ハ指辞の所たるゝや、ハの結ひとくのハべとて諸説あれど、見ハ変格の結ひまそくくとゝ活へり○ものづゝみものを隠くみかくを、物ニ恥ちふゝと

こゝに。物おぢを（夕ヘ恐）ゝるゝおぼゝ（メツタニ）おぼゝて。すゝの京ニ（乳母ハ揚名介の妻ヘ）ものを。ゝ伝る所ニ（ヒツカニ）ゝひ。ゝくれのゝ。ゝ。それかい（ヒ）とゝぐるゝきたにまゝゝびのひて。山里ニゝ（ヒ）ろひるんと（ヒ）笑ゝたるゝ（ヒ）ゝ。ゝゝゝゝゝゝ（五条）ゝる。ゝゝ伝りきれバ。（方遠ヘ）あぐゝふとてあや。ゝ。ゝ。ゝ

ろきこのごと」やくるまもたくぬ恨み言とふ言とゝ〇たゞくくまん」養育せんと〇ひとぞ侍ゝいひてゝ〇ゝゝおぼゝしくゝゝ」夕皇の方まてハたれも志つゝとは玉髪をそゞゝる人なしとて、西京の乳母の家よやゝまゐれてゝすゝくる所のゝとゝ

二小ノ段五節

外ぐれの志づゝるゝゝ」をゝゝも秋の市るゝゝゝ夕ぐれの物表るゝゝゝ物かきいだゝて源の弾ゝゝゝ

りよけるほめのとの」
湖月よ、右をお母もタ
良のめれとなりしく、
きてやきてとふ右近
母よおくれしとえ西
京の乳母ハ右近お母
うぜそ法のとなるべ
しとあり○いとしもん人
よ」引きえ、孟津よ思ふ
とていとしもん人よな
ゆざらんもおるるひ
てぞえぬぞ忘しきと」
比叡のんをとれまえ○
なるるびたるこそ」ハ
おのるきやうなるえ○
とりまづしてハ京」
俗ヒヨツトシテハ人よ
多ぞるさるくらあな
るおえ○さもぞよ
りのつみし」サウハ

の矢のらうたぶりのひて。おの所あたりさら
ぼおふ生たてのひしを。思ひのひ知れバいおで
お世よ侍らん。とそこん。いとしもん。よとくやし
くなん。物をるるげよのしのひしんの所んを。
あのすしきん主君ん。まく。とし。びるひ馴ん侍けることと
ゆゆ。源の相をおるびたるこそ女ハらうこけ。賢
こくんよるびおぬいとんづき。キニクハヌなきこざるう。
源の自らえ
ふ川おらたるあぐしく。シカくトそぐよおるしぬんるら
ひよ。女ん。たぐや柔和こらのまて。とりえづしてえ
んよあぐむろれぬべきぞ。さもぞよものづみ



云フモノ、物恥して
えこのうのうのほこ
ハ、源氏の今仕せら
る方へ、源の仕せら
る所ぬこまふ、夕良
ハすてをるれば、よく
叶ひしものをいと思
ふよ殘念なりしと
て右近ハるくさまえ
○引のおくるりて」
先ハくれゆく秋の夕
づのけしきえ○引
人のおふんしんのけふ
りをもとるのむれば
とハおえしタ良の華
の烟を、今あのもうと
思ひて眺むれどこの
をえ小構よ、二の句け
ふりとをもをといそぞ

しみん人夫のんまいきぞおいんるん哀まそ。まのんのの
のまきえ
のまくまとりなほしてこんよ。るりカハユラシウおく
ぼゆべきるどのるへば。右近河これほこのこるふ。
めてをなれ殘いざりれりと思ひのふるまも
くちを殘念くくゆるこざるとてるくそこのう
ちくるりてぽひやくあるるよいといこうちきを泣
なぞめるまれ源
こくんのりくふりを火葬の烟えとるぞむれバタべの
京も むつまきされとむとりごちるくどえ右
近ハ熱くくて冷え美ルできぬえ
さしいちつも ゆえば。右近ハよ
るまうまそおそせる

八事たのくるやうあれど物しぐ〜げかをあのやそぢと思ひてるぶむれぶえとありむつまーきこれとハ睦まく親しまるくヂヤナアといふとえ○ゆやうまておもせまあこのハ」只今古近の源よちのく別てあるやうよ夕白の源とおもしまさぐうれ〜のらんと思ふよこのるまきとえ○ずさうちのきあ『河海抄』ハ白氏文集を引て八月九月正長夜千声万声無止時とあり○うちぎして」ぎーてい誦えぎんどといふおれ〜ときえ

あバ。と思ふかも。（右近）むのこふこのりておぼゆみ（ゆん）かーぶまーうのとあきぬこのおともおぼーぶまるさへ恵ーくてずいさよなおきあいうちぎいてふーいいふまぐり』二小段の才五節え。源痛哭の（俗波の三月日の立ほどよ。源ハちはかくれふさまえ是まで外ぐれのあづのへのあ裁のれぐよむーのねもきぎれて」とかきかーて。みくうーぶまーかつ〜きぬこのおとをおぼーかるさへ恵しくてずさよなのき歌とうちぎーてふーふまぐり」と結べるハたぐ夕くれとふーのえりとの思ふのこるしバ。あの五条の八月十五夜の夕くれのあづうるるさまを思ひいぶーぬへるさまきれバ。気のけーきいと哀るるよ」とあるハ。五条よて気とぶ雁の夢とうあつめてあのびのこきこ」とあるひーよ思ふ。物まへのあ裁のれぐよ」とあるハ五条よて歌の春ハちはかくるふもおれ〜ときえめきたり」とあるよ照ふ〜。むー





三小ノ才一節

とうなるとーやうなる」殊よ以ふのやうなるえ○うーと」を惜んよ氏方を源のつ〜とあかりーをきのどくよ思つえ○とはなくちりなん」まの伊与のかるれられて遠く任国へりんとをるよ○物ぶーるれぬるのと」源ハ氏方をもそや忘れるふやと試よあまるえ○とりぬをもの歌」細流よ云源めるやうのふをもも歌ハえぐうて問をーぬを源もえなどのとも考伝のハで狂ふるを思ひぐ

ーのもるきこのれて」とあるハ五条よてむーのえぶみぐうぶ〜。まどぼよゆるひゆくるは耳よ。さーあてたるやうよ明うぐるる」といくるよ照ふもる文法えうやうよ一く照ふしてあるゆふよ。自分への衣うつ砧の音をきくるひ」その耳のうぶまーのるーきぬこの音をおぼーぶるさへ恵ーくて」と文を廻ーてうけあり。さていもらのこまこはーき照ふまでハ大うるのくハえをぐーてんをとぐめざるべけれぐぶ〜けれどぐさくあおどろのーおくえ。あのいよ（伊与）れ家のこえ（源のうえ）条るをうあれどとよあるーやうなるとつてもあるハぬぶうーとおぼーてよるをいとほーと（キノドク）思ふよ。かくるげるひ（源の）のふをゆて。さとぞのようちるげきろうとなく下（ぐ）りるんとをるをさとぞのよんぼそけれだ。おぼしるをれぬるのとろ〜ろえよ。うけ〜（久の君）（源の中将逸例をえ）ぬえうるや

る〻餘満よいうぞ
うりこのハといつるハ五十日をふくゝそとめる
るゝんうとあり○まもぐハ」引あゝ益田の池ハ大和ゐるあり、河海よ、相ぬるそのくるしみるらん云ゝ
あぞ申そぐのいける
のひなき」とあり○
さこのいそるまーと」を
いるくをとぐめてのる
ふゝ、それい逢のいふ
とぞ此方よりそい
ふべけれとゝ○うせ
うの歌」を蜉の八世の
冠辞まそうう志げ
と云とゝそれよ此女
の歌蜉をかけうう、と
のゝハ、蜉の羽の縁語

むをとよいでくいえこて。
とそぬをもなどのととそで羽ふるいのぞ
ありこのハ思ひうぐるぐ。まをぐこそまとるなんと
きこえうり。めづしーきこられもあそれと
それ孫たぞ。いきるうひなきやぐいそまー
とそあ。
空蜉の世うきものと志りまーをみとあそよ
かる命よ。そのなーやとぞてもうちとるぐあ
るよ。こぐれあきのくるいとうりくーげるめ。
粧このあぬけをを忘れのハぬをいとほーうもを



ゝ家のゝこハ世ハうき
ものと知りたそーしを
まるかやうまとそる
ゝよつけて命をかけ
とぐめたるまとゝ○あ
のもぬけ」市川の家よ
てぬきまべーつる衣
のとゝ○とぐふまり
ぐる」をのハを家ーて
うけるゝ

三小ノオ二節

花人ぶね」二条のおと
ゞの男、仏徽殿大后の
兄ゝ○あやーしやゝ」
新ぐの既る男女の交
りるーたるを少将の
あやーくぐふべーゝ
○同のうるものあ」
家とふハ萩まさ結
そべりといふ縁語ゝ

あーうもぐひるぐ。かやうにくかーぐハゆ逢あ
ゝせどけぢのくとは思ぐ。さ逢ぐよいふあ
ひるあーぐを見てやるんと思ふまり
けるぐ」三小段の才一節ゝ。源痛哭の餘波の五。伊ふの分下國ぜんとーて。を録うり源ゝ消息をまるる歌ゝ。
あのかうこのうきハ。花人の少将をるんうゝそ
とゆのふぷあやーやいうる思ふんと少将のんあ
うちもいとほーうまこのゝけーきるゆ
あーくれば。小天ーて志ようり思ふこころハ
志りうまゝ。あやといひつのをん。
同のうるもの新ぐの萩をむしをずハ家北あ

之ハかもとのうち彩の
萩の葉を除だにハ
そこ〜ゞうの恨を
もなんでうけマシヤウ
とゝ、彼の中川の家ゝ
て葉を除びゝるを
ふくめたり○たのや
のるをぎよ」見ハ
ゝざと少ゝの目よふ
れ〜めとの之ゝ加
よ思そとのるゝれど
云〜」とあり○少ゝの
なきをゝ」原ハ少
ゝるもゝせんと思ゝ
下心ゝれどふ天ハ少
ゝの居ぬ時ゝゝせし
○風のめゝゝの家ゝ
のめゝの風ハ原の書
伝をさゝゝ考萩ハ
自分をいゝゝ原

ぐさ。ゝ紙ゝるゝ。このけす。ゝのやこのなるをぎに
つけて思びてとのゝるゝれど。とりあやゝり
て。少ゝるもゝハけて。ゝれゝりゝと思ひあゝせ
バ。さゝとゝつゝあゝ。てんと思ふゝんあゝり
ぞあいゝのゝけゝ。少ゝのなきをゝよゝれ
だ。んゝ〜と思ゝどかくゝばす。ゝるのさゝを
おゝて。ゝ原ゝゝ。ゝちゝきゝゝをゝゝとゝて
とゝゝ。
風のめゝゝゝゝつけゝゝゝ萩のゝるゝば
ゝゝゝゝゝゝ。てゝゝあ〜ゝゝゝをゝぎ



の考伝よつけてゝるほ
ゝ〜ゝゝりを捨ゝゝぬ
ゝやと思ハバ半分ハ
ゝれ〜ゝれどゝゝハ
牲物思ひのゝゝゝて
ゝゝげゝゝゝゝ○風
ゝげよみ〜ゝの原
ゝよこの碁ゝち〜萩
のゝを思〜ゝゝゝ○
ゝゝこゝゝゝゝよ」ハ
リコリズニといふとゝ
拾遺よゝハそゝた
る羽ゝ、万葉十五よ、
あハをゝゝてよ
めゝゝゝゝゝてよ
ゝ、とあり、

四小ノ身一節

先ようゝゝ夕白のゝゝ
○とそゝゝ」事を省
略せゝゝ○さゝゝぞく

ゝゝ〜。ゝれゝゝみてゝいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝのゝ
げよゝゝ〜ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ようぬめてゑゝ」法師ニ布施もる装束を始め金銀諸具を省略せぬ〇陸仏のあざりまでおろかなるらんに」経仏の荘厳ニ至るまで粗略ニせぬ〇別文つゞらせるふ」原下ニして綴らせるふ、誄をるべし、誄ハをぬびどくよむ〇ものゝくるゝ〜ゑゝ」此下書のまゝまて加筆もるこゝ云〇なるほど人もるゝ」博士あやしゝて何人もるらんとゐふ〇かゝ博ばゝもるげるれゞうりもるゝ」原の如此歎哀みるふいと

もゝこまのよぎ陸もるどをさせるふ。陸仏のうざりまでおろかるゝに。怪光があるの阿闍梨いとさうとき人まで。るう志けり。馬ふこの師まで。むつまゝくおぼをもん。文章博士ざうはうせめゝて。別文つゞらせるふ。その人とるくて。衣と思ひゝ人のもの行徳アルるきさ海よりにる。依頼仏よゆづりたてまつるゝ。あそれげこうき出るゝ人れば。博士詞あくるゝ〜ふべきと侍らざりとゆを。原志のびるゝどゐるゝぶもこぼれていゝゝぶく。おぼゝゝれだ。博士なるゝ人もゝん。その人とふゆを





博士のあやゝむゝ〇もくせのたのさとといひりり」もくせハ相縁ん、俗ようシアハセナ人と云ほどのとゝ〇ものくゝもの言」評釈ニ云いゝ〜ハ男女おのゝらひて又人ものあゝ。すゞき誓ま下袴の紐を結ひあいて、他人ま解あいまゝ〜口のゝゝめたりとゆゆとあゝさハ波なるゝら今日ま結ふ下紐を何世ようときて夕自をゝんるべきとゝ、心とけてとゝふさま紐をとくをるたり〇いつまの乃ようゝ」もハ今日四十九日の追善の功徳ゝて、夕自の魂もるゝてかうおぼゝるげるをゝこのり（ホドヒ）なりれん。もくせのるのさとといひりり。志のびてゝ（調）ぜさせるへりけるさうぞくのゝの袴をとりよせるひて。（装束）

原るゝゝもりふハ系のゆふ志さひも紙いづまのせるのとけてゝらるべき（原ん）紐ますでハ（夕自の魂魄ハ）ふるる。いづまの乃ようさぶまりておのむくらんとおのゝ。ぬん（念誦）ぎをいと衣ゝるふ。原中ゐをゝるふゝもあいるくもぬさぎて。（ナニトナク）（玉祭ン）このおひゝ川ゐ稜。さるせるゝけれど。かゝごとゝ（ウラミゴト）

八六道のうち何ぢの善道に赴くるらん、と思ほゆる。

四小ノ第二節

あの夕ぎほのやどうまに」夕顔ハ何ふる行ぬ人ハ夕顔ハ何ふる行ぬひぬらんと思ひ惑ふ。○げにひをさびのりまや」もハ確とハ知れぬどやうにを入てどうやら源のちとざまとひそまいふ状に○り〜ぞやうの子どもに」自然受領の子共などの夕顔を盗で所帯なる怖を憚りてあつれてありたるまゝと疑ふ状に○ものぐ〜き」ウハキ

怖テ聞カセ玉ハヌ

おぢてうち出給たる」四小段の第一節に。源痛哭の修波の七夕顔の四十九日の法會を比叡山の法華堂にて行ふ事を叙せり。あれ夕ぎほのやどうまハいづこのうまにと思ひまどへどそのまゝよえ弱ぬゆえぶ。右近ぎよおとつれぬぎあやしとおもひなげきあつるぞ。〜ゐるに〜ねどけをひをさびゐりまやとさめきちのば。怪光をこちられど。

性光ハ

いとのけたるれ氣をなくいひるして。なほおぼ〜ごと好色してきありきけれど。夕顔の家の人〜ゆめのんちして。ものぞるやうれ子どもの泣き〜〜きぞ。中ねぞの怖えるおぢきこをして。やどてみてくだりけ

率



ラシキに○めのとれむすめ」西京の乳母即ち撫名所の妻の女に○右近ハと人」右近ハ別の乳母の子に○あしの海〜」乳母等まヤカマシクいひ騒ぶれんとを怨れ思ひて。○あさまし〜ゆく〜て」きまうさむるまで、玉髪の行方も知ぬ。月日おをぎゆくと。○又の歌」聖夜に○ほのるに」あさとのまえ○ありし海ちぞ〜」あの海の別荘のゆる〜海のまくまて。○そひ〜〜女のさはかぬ」海まて表ま夕顔ま

源氏物語

ゆふぎほ

五十七

るるやとそ思ひようけるこの家あるぞ。夕顔の宿のアラシ

京れめのとのむすめなりける。三人その乳母の子にありて。右近ハと人なりけれど。思ひ儒てく。法名夕顔の穂をきこせぬなりけりとなきこひけり。右近ハ泣

おぼ〜くいひさこのれんを思ひて。源夫ものまきこ

ま〜〜さぞと思びまへバ。玉撃に。きこれうをだよえきこのぶ。あさま〜ゆく〜なくてきぎゆく」源夫ハゆめまぞにこそだや。と笑ま〜〜こるよこのゆう法

事ド志給てみの歌。ほのまるのあのありし海なぞらそひ〜〜女のさはかぬ。おれぞ〜やうまそみを

原たるべき変化の是ハ法力をもつてさる妖物の退くさまを今夜又爰にみまもる○已れまことにいれぜんを原まことにられぜんとして序より夕自より祟りてあれぬくうせぬると思へばいまくしきことまてあるべきことを、

四小段の中三節

女房のものゝ言は今度ハ女房をぐゝて下らんまハと云てぬき料の物をどぬんごろまゝ踊りるゝ○くゝしあふぎ」排ハとぐゝをりをとゝくゝ、扇ハ遠ふと云きまて祝ふゝ○ぬさ幣ハ五色の織を細けれを。あれるべきこゝろまをこれん妖物のゝ

これまこれいれぜんこゝろまゝ夕自のなりぬるとゝ

とおぼゝしいづるまゆ（イマ〳〵シク）しくるゝ。

四小段の中二節

哭の餘波の八。ぜ和を五條の夕自の宿より殘つゝ人くゝ比あゝ〳〵まを叙ゝ。結尾まゝ（伊よかり）りて変化の筋を結びたり。

いまゝ比（上旬）まけ神無月のついゝちごろまくぶる。女（下国）

房のくぶんまとて。たゝけんとまをさせるふ。（原より）

まゝうちゝ（女房方）まゝ（口舟）くゝとぶまゝうまひてゝこゝまやあ

まをゝきさまなるゝ（構）あふぎ（扇）おぼゝくゝて。

ぬさ（幣）などゝぶゝとぶまゝゝくゝて。ふれこゝうちゝ（小）袿ゝ

つのゝゝ。





より切りて袋三入れたるゝ旅路まゝを向の料ゝ又切らぬもの（原より）○あのゝゝうちき」後のぬきまゝくゝつる小袿を遠しのふゝ○あふまゝの

あふ」まハさうとも遠ともやゝ、と遠ゝまゝの形ゝ

まゝとぐめゝ小袿なるぶ、

ゝの紬くゝるまゝで

思ひのいゝぶゝまゝるゝ

けるよゝゝ○塚のゝ

かの爲ものぬけハ衣ゝ

ゝ、今ハ冬の衣なる衣

ゝ塚の羽のぬく藤あ

りゝ衣ハ今ハ裁ふゝ

て、冬と紙たるゝ、今

まゝ衣を遠まるゝ

をゝゝるまつけて考ゝ

まゝうゝとゝ○見ゝ

あふまゝでのかゝみむゝりとゝゝほどゝひ

ゝまゝ紬れくちまゝりるゝれ。（拙）（原より）ゝまやゝまゝゝ

ゝどもはれど。（メンダウナレバ）ゝまけれバめゝゝ。（伊ゝ五ゝ八ゝ九ゝ）ゝまひ

ゝ（内分まゝ）りまけまど。ふゝゝてゝうちまゝの（原より）ゝ

ゝ（きのゝ伊ゝ）りゝまけまど。ふゝゝてゝうちまゝの（原より）ゝ

りゝまりハゝ（内分まゝ）ゝ西まゝゝたゝ。

塚（原）のまゝもゝまゝけるゝ衣ゝまゝ

ゝまゝ（原より）ゝまゝ。思ゝ（原より）どゝまゝゝゝ（ゝまゝ）

ゝまゝ（原より）ゝまゝ。思ゝ（原より）どゝまゝゝゝ（ゝまゝ）

ぬゝゝろゝまゝゝ（伊ゝ五ゝ下向のゝゝ）ゝまゝゝまゝゝぬゝゝ。

思ひ（原より）つゝけのゝ。（拙）（今日ハ九月の末ゝゝ立冬の日ゝ）ゝまゝゝ日ゝりけゝゝ

まゝゝゝゝまゝゝ（時雨ゝ）れてゝのけゝきいゝと表ゝり。

〜もの哀」迄ハ夕
良の上ハふとうるくハ
き様をいふ言ハ迄よ
〜もろふ別るゝも、二
乃るぶ〜いつまつも行
方志〜ぬ秋の暮ぞヤ
ナア、と秋と哀とを
夕良と哀様よかけ
て歌きのつゝる〇猶
ゐ〜人志れぬこゝ哀
のこゝも夕のこゝも人志
れぬこゝるれバ花ゝよ
つけても世よ思ふと
ハ苦〜と思知のゐゝ

添句

かやうのゝ尤〜しき
こゝ山夕良哀様のゝ人の
こゝをいふゝ此すハ源
も強ひて強〜ゐゝバ、
侍気の毒ゝて皆漏〜

源ハ哀を
なぐめ〜〜〜〜〜のひて。

源 迄てゝ〜もゝ
志〜ぬ秋の暮ぞれ。枯ゐ〜人志れぬこゝ
ゐ〜けゝと和ぼ〜志ゝぬらんゝ』四小段の才三節之伊ふ
かゝゝ哀様と源の雜別の情を叙せり。さて源の夕良
を痛哭〜のゝふ狀ハ上の才二節まて結び付ハ哀様
のこゝの〜卿かけり。さるゆゑよ小袿をゝ〜のふとい
ひて。哀様の書の首尾を志め〜。まゝ引ぎゆ〜もゝふ
ゐ〜ありけゝ哀〜」と云羽をゝくて。帚木の巻ゝりこゝ
ゐのゝ〜〜を結べゝ。花れ迄を才二地
大段ゝん。ゝん人注ゝして味ゝふ者〜。かやうのゝ
〜ぶ志ゝきこゝ。源のあるぶちゝかゝゝゝ志のびゐ
ひ〜ゐ。いとほ〜てゝれゐちゝとぐめたる

十二号十四

とぐめてゝあるをゝ〇
ゝん人さゝへゝき」源の
ふるゝひを、かゝゝゝ
ゝりゝん人と云ゝゝ
て此物後の作者を云
ゝ、ゝほゝるゝ」ハ
片ほゝるゝゝを去
ほゝゝゝるゝて、つゝ
ろひ賞ゝ〇つゝゝり
どめきてゝゝゝる人
作りゝのやゝゝいひ
ゝ人あれバ、止を得
ゐ殘りゝ〜かきつけ
ぬゝの主ゝ〇あゝゝり
ゐのいひさぶゐきゝ
こゝ云」源の源〜ゐゝ
ゐをさゝへかきつけつれ
バ筆者ぶ源ゝ〜やゝあ
ゐ〜き罪ハのゐれ避
んゐゐゝるゝおぼゆ

源氏物語

ゆふぎり

五十九

をゝ。おゝどみゐゐどの源子ゝるゝんゐゝゝ。ゝん人さゝ
ゐ〜ほゝるゝ〜ゐゝものほめぶちゝるゝどゝゝゝるゝゝ
とめきてゝゝゝる人ゝゐ〜源ひゝれをゝん。
あゐゝゐれいひさぶゐきつゝ。さゐゝどゝろゐ

以上ハ文法の添句といふものゝ。上の大段落ゝ
て殘びたるゝ文を。更ゝ又評じたるゝ。そゝゝ文ゝ
冒頭源句のあるゝ。序跋ゐどゝやゝうのゝとゝ知ゝゝ
ゝ。さゝて此ゐゝ細流ゝゝゝ湖月の師説ゐどゐめ〜。帚
木の巻の義端ゝ照応ゝたるかきさゐゝ。結尾のあ
ゐりゐのいひ殘ゝ。者を省きて殘びたるゝ。
法ゐれバゐん和ゐゐゝ。ゝん人さゐゐゝゝゝゝ
ゝゐどやゝうの羽を源てみゝゝ。きれゐゐゝいとめで
たき者づゐのひゐゐゝ。

るとのきなり、

夕顔の巻終